
IS インフィニット・ストラトス蒼き翼の勇者

剣聖龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス蒼き翼の勇者

【Nコード】

N1932X

【作者名】

剣聖龍

【あらすじ】

サファイアのような瞳を持つ少年、天空寺蒼太。

ガンダムオタクで、インフィニット・ストラトスを知り尽くした彼には極めて希な特異体質が幾つかあった。

ある時、猫を助けた事でトラックに跳ねられ死んでしまうが、助けた猫が神様の娘だった為、インフィニット・ストラトスの世界へ転生する事になった蒼太。

神様から貰った白式を駆り、蒼太は亡国企業、そして様々な次元世界を荒らす、次元犯罪者に立ち向かう！ 一夏は存在していない設

定になっています。

プロローグ（前書き）

説明が複雑です。
ごめんなさい。

プロローグ

「????」

「あれ？ここ何処だ？」

気が付くと僕は虹色の空間に浮いていた。

「確か…道路に飛び出した猫を助けようとして…」

「君は死んだんだ」

「え？」

声がした方を向くと、どつかのゲームに出てきそうな虹色の服を来ている男性が居た。

「まずは私の事を紹介しよう。私は全ての世界を統べる神だ」

え？今何て言ったこの人？「つまり…神様ですか？」「そうだ」

マジかよ！この人神かよ！！「ところで、さっき言ってた『死んだんだ』って僕は死んだって事ですか？」

「それはだね。君は猫を助ける為に飛び出した時、トラックに跳ねられて死んだんだ」

「ええ！？」

マジかよ！僕死んだのか？「本来なら君の魂は輪廻転生し、新たな生を受ける筈だった。しかし、君が助けた猫は、実は私の娘だったんだよ」

「む、娘…」

「あの子はかなり落ち着きが無くて…暇を見つけては君達の世界、つまり下界に猫に化けて遊びに行っていたんだ。」

私は止めたが娘は聞かなかった。本来、私達神は下界には行つては行けないんだ。下界に私達という存在が居ると起こる筈の無い出来事が発生したりするんだ。そして、今回に至った、という訳だ」

「そ…そんな…」

自分が死んだ理由がそんな事だったとは…

呆れてもう何も言えない。「だけどね、君は娘を助けて死んだ。そ

のおかげで大事にならずに済んだ。

そこで君にはお詫びとして転生者の資格が与えられたんだ」

「て、転生者あ？」

小説とかでよくあるあれか？

でもそうだとしたらかなり嬉しい。

「君の事は知っている。私は神だからね。転生先は『インフィニット・ストラトス』なんてどうだい？」

「インフィニット・ストラトスですか…はい！そこに行かせて下さい！」

「よし分かった。ではISが必要だな。何が良いかな？」

「白式でお願いします！」僕は即答した。白式を選んだ理由はインフィニット・ストラトスはアニメと原作を見まくり、その中で主人公、織斑一夏の白式が一番かつこ良くて好きだった。それに一回ISを動かしてみたいとも思っていたからだ。

「白式か…それだと主人公である織斑一夏君が存在しなくなるけど良いかな？」「構いません！」

これも即答。一夏さんは主人公だから尊敬出来る所もあるが、いくらなんでも鈍感すぎるので一度、あの鈍感さを反省すべきだと思う。「それじゃあ原作を少し変更して、白式は作られていない設定で私を作り出した468個目のコアで出来たISで良いかい？」

「はい！」

僕が返事をする。すると左腕に白式の待機状態である白いガントレットが装着された。

「他に何か要望はあるかい？」

「じゃあ…出来ればISの訓練をして白式に慣れたいんですけど…良いですか？」「勿論だとも。私の娘の下手際でこうなったのだから、これ位の要望は叶えてあげるさ」

「じゃあ、よろしくお願いいたします！」

それから白式に慣れる為、訓練が始まった。

最初の内は初期設定だったので動きもぎこちなく武器も近接ブレイ

ドしかなかった。しかし途中でファーストシフトした事により、形状が変化し、機体が自分の手足のように動くようになった。武器も雪片式型になり、そこからはより実戦的な訓練に入っていた。

それと平行して、ISの知識等も教え込まれたので、ISの改造等も出来るようになり、実際、白式を改造した。

そんな事をしている内に僕が白式を貰ってからあつという間に1年になり、その頃にはISの操縦技術と知識、それに白式が凄い事になっていた。

「まさかここまでレベルアップするとは…流石に私もびつくりしたよ…」

神様もかなり驚いていた。まあ僕もだけどね…

「ともかく、これで訓練は終了だ。これから君を転生させるが、幾つか注意すべき事があるから心して聞いてくれ」

神様が真剣な表情になった。余程大事な事なのだろう。

「まず1つ目、本来の主人公である一夏君がいないの事と君というイレギュラーが転生する為、原作やアニメには無い出来事が起こると思う。いや、これはまず間違いなく起こるだろう。そのような出来事は君が率先して解決する事」

「分かりました」

「次に2つ目、君の世界のインフィニット・ストラトスの事は話さない事。もし漏洩したら世界がメチャメチャになるからね」

「成る程」

「3つ目、これが一番重要だ。実は君の転生の理由は2つある。1つは不手際のお詫び。しかしこれはあくまで表向きの理由だ。

本当の理由は君に次元犯罪者の殲滅をしてもらいたい」

「次元犯罪者？」

何だそのアニメに出てきそうな単語は…

「次元犯罪者とはその名の通り、様々な次元世界に現れ、犯罪行為を繰り返しては別の次元世界に逃げ込みその世界でも犯罪行為をする。これを繰り返している輩の事だ。しかも厄介な事に奴等は様々

な次元世界を渡り歩いたせいで様々な世界の兵器や力が使える。

そして奴等は現在、インフィニット・ストラトスの亡国企業と手を組んでいるという情報が入った。

このままでは何かとんでもない事が起こりかねない。奴等の力は強大だ。そこで転生者となった君には亡国企業と次元犯罪者を殲滅して欲しいんだ」

神様が言い終わると僕はしばらく考え込み、結論を出した。

「分かりました。やらせて頂きます！」

「ありがとう。最後にこれを渡しておく」

そう言うとき神様がテニスボール位の大きさの何かを取り出し、僕に渡した。

銀色で、横の表面には青い光のラインが一周するよう刻まれ、上には青い光のラインがダイヤモンドを描くように刻まれており、中央には黒い丸があった。

「神様、これは一体何なんですか？」

「それはセイントカプセル。その中には全てのガンダムシリーズに登場する機体のデータが記録されていると同時に全てのガンダムパイロットの意味も宿っているものだ」

「機体のデータとパイロットの意思が…でも何でこれを？」

「それはOOのGNドライブを元にして作り上げた物。あらゆる機体と融合可能で、新たな存在へと進化させるアイテムだ。

しかしそれをセイントカプセルの上部にあるダイヤモンドに光が灯っていない状態で融合させると融合した機体のパイロットはガンダムパイロットの意思に取り込まれ、やがて死に至る。その原因はガンダムパイロットの意思が融合する機体のパイロットを真のガンダムと認めてないからだ」ガンダムとして認めてないって…OOの刹那かよ…

「しかし、真のガンダムとして認められた者ならば、セイントカプセル上部のダイヤモンド中央にある黒い部分に光が灯り、意思に取り込まれる事は無く、融合でき、全てのガンダムの力が使用出来る

ようになる！そしてその機体は新たな存在へと生まれ変わるんだ！」
なんか神様の説明が熱くなっている気がする…

「そして、融合した機体はセイントカプセルが進化したGNDドライブが搭載されるんだ」

「なっ！？GNDドライブが！？」

流石にこれは驚いた。

GNDドライブがあればドライブが破壊されない限り、半永久的にエネルギーを生み出せるからだ。

「まあ、正確にはGNDドライブで有り、GNDドライブで無い物だけだね」

「どういう事ですか？」

「セイントカプセルが融合してGNDドライブに時なる、GNDドライブに進化させる力はその機体のパイロットの『思い』なんだ。

その思いがGNDドライブへ進化させる為、従来のGNDドライブとは全く異なるGNDドライブが誕生するんだ」

「全く異なるGNDドライブ…それはどんな物なんですか？」

そう尋ねると、神様は黙り込んでしまった。

「神様？」

「…すまない。こればかりは私でも分からないんだ」

神様は申し訳なさそうに答えた。 「…そうです

か。それなら仕方ありません。でも神様、僕は必ず真のガンダムになつて見せます！だから神様が落ち込む必要は無いですよ」

「ありがとう、君のような優しい人間なら大丈夫だ。じゃあそろそろ…」

神様がそう言うのと僕の先に緑色の光で出来た柱が現れた。

「準備が出来たらあの柱の中に移動してくれ。そこで私が転生させる。それと、君の荷物は用意しておいた」

そう言うのと僕の目の前に僕が使っていたリュックとカバンが現れた。一応中身を確認すると以下の物が入っていた。

・携帯電話

- ・携帯電話の充電器
- ・PSP
- ・PSPの充電器
- ・ガンダムのゲームソフト・ガンダムの小説等
- ・ガンダムのDVD
- ・筆記用具、ノート等
- ・着替え等の生活用品
- ・イヤホン
- ・ノートパソコン
- ・財布

私物がかなり入っていたので嬉しかったが、財布を見たときびっくりして腰が抜けた。

なんと入っていたのは札束がだったからだ。

流石に札束を財布に入れておく訳にはいかないので、小型の金庫（？）のような物を出してもらい、財布にはある程度だけ入れておいた。ちなみにその金庫、僕の指紋やらパスワードやらを入力しなければ開かない為、かなり厳重だった。

最後にセイントカプセルをしまい、リュックを背負ってカバンを持ち、準備が完了した。

「準備が出来たようだね」「はい！」

神様の確認に返事をする。「あ、そうだ。君の能力だが、使い所はよく考えて使用するんだよ」

神様がそつと言った。

「…分かってますよ。じゃあ、行ってきます！」

緑色の光の柱に向かって歩き出し、柱の中に入った。「神の名において命ずる。新たな生を受けし者よ、今ここに転生者となり新たな世界へ舞い降りろ！」

神様がそう言うと柱が僕を包み、次の瞬間、僕はその空間から消えた。

主人公紹介（ネタバレあり）（前書き）

主人公と白式についてです。

主人公紹介（ネタバレあり）

名前 天空寺 蒼太

（てんくうじ そうた）適性ランク S

好きな物 焼き肉 カツ丼 ガンダム 青空

嫌いな物 差別 イジメ

年齢 16歳

誕生日 8月6日

身長 160センチ

体重 48キロ

機体 白式↓白龍神

見た目 一夏のような黒い髪で、瞳はサファイアのような青い瞳をしている。

細マッチョで、本人は気付いていないが、かなりのイケメン。

性格 恐ろしい位のガンダムオタクで、ガンダムについて彼の右に出る者はいない為、『ガンダムエンペラー』の異名を持つ。

また、インフィニット・ストラトスについてもアニメと原作を知り尽くしている。

優れた人間を人工的に生み出す計画によって生まれ、生まれた研究所での識別は『実験体2号』。当初は生み出された科学者

の夫婦が親代わりになっていた。研究の後、処

分される予定だったが、生み出した夫婦の科学者が激昂に任せ、所長達を殺害した。その後、夫婦は研究所に火を放ち自殺したが、蒼太は間一髪所員によって脱出した。その後、特殊な治療を受け、

研究所での事を記憶を消された。その後は夫婦の

親戚に引き取られ、その時に叔父から剣を、叔母から家事全般を習っていた。（叔父と叔母は蒼太の能力を理解していた。

）無限のような優しさを持つが、少しだけバカな一面がある。

動物や虫、自然が好きで、特に好きなのは青空を見る事。恋愛に関しては普通。かなりの大食い。

記憶を消されても、能力は残り、そのせいで周りから気味悪がられた為、理不尽な暴力やイジメ、差別に対してはかなり冷酷。

幻龍と強龍という日本刀を所持している。

頭が良く、ISの改造等が出来る。

特異体質

人工的に受精した時に別の遺伝子を組み込まれ、備わった能力。遺伝子レベルで組み込まれているので、無くなる事は無い。

- ・超気功『ちよんきこう気』の力がとても強い能力。

これにより蒼太は、通常の人間の数倍の身体能力を手に入れている。

勁けい

気を練って使用する様々な術。気を球に打ち出す、武器に流し込んで威力を高める、等をして相手を攻撃する術や気を使って対象の細胞を再生させる等をして治療する術がある。

しかし、攻撃の勁は蒼太自身があまり好戦的では無い為、滅多に使わない。

尚、勁は機体を展開していても使用出来る。

- ・技一覧

攻撃

だとうけい打透勁

気の球を連続で撃ち出す。

旋風烈脚せんぷうれつきゃく

気を足に流し込み、ローリングソバットを喰らわす。また、足の気を撃ち出す事も出来る。

龍炎拳りゅうえんけん

両手を合わせ、長大な気の剣で切り裂く。

双龍斬そうりゅうざん

幻龍と強龍に気を流し込み、Xを描くように相手を切り裂く。

ひゃっぼしんけん
百歩神拳

気を溜め込み、ビームのように撃ち出す。
いわゆる、かめはめ波。

治癒

ないようこう
内養功

全身の気を放出し、傷を治す治癒の術。
使う対象が絶望的な瀕死状態でも治せるが、自分と死人は治せない。

気を使う術は下に行く程、気の消費量上がり、特に内養功は全身の気を放出する為、一度使うだけで殆どの気を使ってしまう。その為、長時間や連続して内養功を使うのは自殺行為に等しい。
(気は体力の事。休めば回復する)

その他

・アニマルコンタクト
気を使って動物や虫と会話出来る能力。
また、この能力があるとあらゆる動物に好かれやすくなる。

・????

ISについて

白式 (びゃくしき)
神様が作り出した468個目のコアによって稼働している蒼太の専用機。

原作の白式とそっくりだが、実際は全くの別物。
蒼太の手によって特殊な改造が施されている。

世代 第4世代機

シールドエネルギー

1200

機体性能

攻撃 S
防御 A
機動 S

武装

（特殊改造によってバースロットが2倍になっている。）

雪片式型・改（ゆきひらにがた・かい）

従来の装備であった雪片式型を改造し、剣としての威力とバリアー無効化の性能を高めた雪片。見た目はあまり変わらないが、牽制用として小型のビームバルカンが追加されている。ビームバルカンの色は青色。

シールドライフル

蒼太が制作した左腕に装備されているシールド兼ビームライフル。ビームの色がバルカン同様、青色になっている。ライフルとしてだけでなく、ビームサーベル、スタンランサーを装備している。（ブリッツガンダムのビームライフルの左バージョン）

幻龍、強龍（げんりゅう、ごうりゅう）

蒼太が使う日本刀をISが使用出来るようにした2本の日本刀。

幻龍は黄色と青色、強龍は緑色と赤色がメインカラーになっている。（色は前者が柄、後者が刀身の色を表している）

ミサイルポッド

白式を展開した状態の時、両脚部に搭載されている四連装のミサイルポッド。

白式の中で数少ない遠距離の武器。自らパージする事も出来る。

ワンオフアビリティ

単一仕様能力

れいらくびやくや

零落白夜

原作通り、自分のシールドエネルギーを攻撃に転化して対象のエネルギーを消滅させる。

蒼太の改造でシールドエネルギーの消費量が従来の約30%になり、より威力が増した。

セカンドシフトした後は蒼太が再び改造し、消費量が10%になり、更に威力が増した。

第2形態 はくりゆうじん 白龍神

白式がセカンドシフトした姿。

姿は白い龍をイメージしている。

関節は青色で、胸の部分には青色のクリアパーツが装着されている。ウイングスラスタが大型化し、4つに増えた。

シールドエネルギー

1800

武装

龍刃・白銀ノ型 りゅうじん・しろがねのかた

幻龍、強龍、雪片式型・改の三本の刀が融合した太刀。形状はほぼ雪片式型だが、鍔の部分にクリスタルがはめられている。

幻龍と強龍と融合した事により、炎、氷、雷、風の力を手に入れた。各々の力に特化した姿になると、クリスタルの色が変わり、刀身にその色のラインが刻まれる。

また、斬撃とバリアー無効化の威力が上がっている。

雪羅・改 せつら・かい

原作の雪羅と同じ、多機能武装腕。

改造により、荷電粒子砲の消費量を抑え、威力が上がた。

特殊能力

聖龍ノ舞 せいりゅうのまい

様々な性能の形態に変化する能力。

各々の姿で色が変わる。

変わる部分は関節、クリアパーツ、クリスタル、刀身のライン。現在は通常形態が1つ、特殊形態が4つの計5つの形態があり、特殊形態には『専用技』がある。

形態一覧

通常形態

白銀
しろがね

通常の形態。バランス型で、色は青。

特殊形態

炎皇
えんおう

攻撃重視形態で炎を操る。色は赤で、龍刃が炎を纏う。炎はシールドバリアーをも溶解させる。

専用技は龍刃に長大な炎の刀身を龍刃に纏わせて切り裂く『真・龍炎剣』。
(しん・りゅうえんけん)

氷輪
ひるん

防御重視形態で氷を操る。色は白で、零落白夜の色が白くなる。斬撃、もしくは荷電粒子砲で相手を凍結させる事が出来る。

専用技は龍刃に気を流し込みそれを冷気で凍らせ、突きの構えで巨大な氷の槍を撃ち出す『氷堅槍』。

(ひょうけんそう)

雷轟
らいこう

特殊戦闘形態で、雷を操る。

色は黄色で、龍刃が雷を纏う。雷で相手の機体を攻撃したり、麻痺させる事も可能。

専用技は気を流し込んだ頭上に構えてから龍刃を振り下ろし、雷を纏ったビームを放つ『雷閃撃』。

(らいせんげき)

風牙^{ふうが}

機動重視形態で風を操る。色は緑で、龍刃が風を纏う。
纏った風を竜巻にして撃ち出す事が出来る。

専用技は追い風で加速し、風を纏った龍刃とエネルギーソードを発生させた雪羅でXを描くように切り裂く『疾風十文字斬り』。

(しっぷうじゅうもんじざり)

第1話 舞い降りるイレギュラー

「ナレーションSIDE」

ここはIS学園。ISを使う操縦者を育成する学校だ。

その職員室でパソコンに向かい作業をしている女性が居た。

ISの世界大会で初代王者に輝いたブリュンヒルデこと、織斑千冬である。

「…少し休憩するか」

千冬はパソコンの時計を見ると、ふう、と息をつき、パソコンの画面から目を離れた。

「織斑先生、コーヒーが入りましたよ」

メガネをかけた童顔の女性が千冬の机に両手に持っていたコーヒーの1つを置いた。

千冬はその女性を知っている。その女性

は、自分が担任をしている1年1組の副担任である山田真耶だ。

「ありがとう、山田君」

千冬は置かれたコーヒーを少し飲む。

「静かですね…」

「…そうだな」

真耶が言った事に千冬が頷く。今はゴールデンウィークで、殆どの生徒が学園を離れている。

その為、学園にいる生徒はごく僅かな為、学園はいたって静かだった。

だがその静かさは突如破られた。

『緊急事態発生！第4アリーナに侵入者を確認！教員は速やかに急行されたし！繰り返す！教員は速やかに教員されたし！』

それを聞いた千冬達はコーヒーを一気に飲み干し、机に置いた。

「山田君、行くぞ！」

「はい！」

千冬達は第4アリーナに向けて走り出した。

「ナレーションSIDE OUT」

「千冬SIDE、第4アリーナ」

第4アリーナに到着した私と山田君はピットの映像でアリーナを確

認していた。「山田君、拡大してくれ」「はい！」

山田君がキーボードを操作して映像を拡大する。

拡大された映像には侵入者がより鮮明に映し出された。

一言で言えば男だった。

歳と顔つきは高校生位で背中にはリュックを背負い、右手には旅行カバンのような物を持っていた。

「何故、男がここに……」

私は疑問に感じた事を呟いた。

今はゴールデンウィークで殆どの生徒が学園を離れている。学園に残っている生徒も僅かにいるが、その中に男はいない。

何故ならISは女にしか使えない。

その為、ISを使えない男は入学出来ない。

しかし今、男がアリーナにいる。

少し考え、私は山田君に指示を出した。

「とりあえず、教師部隊を送れ。万が一の為に武器を持っていかせろ」

「了解です」

そう言うとは私は映し出されている少年を見た。

く千冬SIDE OUTく

く蒼太SIDEく

柱に包まれ、気が付くと僕は違う場所にいた。

しかしその場所が直ぐに何処だか分かった。

IS学園だ。IS操縦者を育成する学校。そのアリーナに僕は居た。周りを見渡し、僕は本当にインフィニット・ストラトスの世界に來たんだと感じた。

しかしその時、何処からか緑色の鎧を纏った2人の女性が現れた。その鎧を僕は知っている。IS学園の訓練機、『ラファール・リヴアイヴ』だ。

更にいつの間にか僕の左右に鎧武者のような銀灰色の訓練機、『打

鉄』を纏った女性が居た。

空中にはラファール・リヴァイヴ2機が滞空しており、地上には打鉄が2機。

しかも打鉄は近接ブレード、ラファール・リヴァイヴはライフルを持っていた。(これは流石にキツいな...) 白式を使う訳にもいかず、右手に持っていたカバンを置き、両手を上げて降伏のポーズをとる。すると、向こうに抵抗の意思が無い事が伝わったのか、武器を下ろして何か通信をしていた。

すると左右に居た打鉄の1機が近付いてきて、いきなり僕の鳩尾に拳を放った。「ぐっ!?!」

その瞬間、僕の視界が真っ黒になった。

「う...ここは...?」

目が覚めた僕は辺りを見渡す。見たところ、学校の保健室のようだ。僕が寝ていたベッドの足下にはリュックとカバンがあった。

しかし、あれが無かった。「っ! 白式が無い!?!」

左腕に違和感を感じ、見ると装着していた白いガントレットが無かった。

直ぐ様探しに行こうとしたがドアが開かない。

ならば窓から、と思ったが地面との距離が恐ろしいくらいあった。おまけに監視カメラまであったので特異体質の能力を使う訳にもいかず、断念した。仕方がなく、しばらく待つ事にした。

待つこと10分、ドアが開き、黒いスーツを着た女性が入って来た。

「気が付いたようだな」「えっと...」

「そう警戒するな。私は織斑千冬。このIS学園で教師をやっている。お前は?」「ぼ、僕は天空寺蒼太といいます。ところで僕のISは...」

恐る恐る聞いた。

「やはりあれはお前のISか。ついてこい」

「は、はい!」

「それと、ここでは私の事は織斑先生と呼べ。分かったな？」

「はい」

僕は指示通り織斑先生の後についていった。

（最高機密室）

織斑先生についていき、到着したのは周りにやたらでかいコンピューターやら何やらかんやらが置いてある薄暗い部屋だった。

その一角に案内されると何かの機械に待機状態の白式が設置され、解析を受けているようだった。

その機械を操作していた女性の1人が織斑先生に気付いた。

「あ、織斑先生」

「山田君、解析は？」

「なんとか進んでいます。ところで彼はもしや……？」山田君と呼ばれた女性が僕に気付いた。

「はじめまして、天空寺蒼太です」

「天空寺がそのISのパイロットだそうだ」

「そうですか、私はこの学園の教師をしている山田真耶です」

そう言つて山田先生は僕に挨拶をした。

「それより織斑先生、このISなんですけど、とにかく凄いです！これを見て下さい」

山田先生がキーボードを操作すると白式のスペックデータが表示された。

それを見た織斑先生が少し反応した。

「機体名、白式。高性能万能型の第4世代機、シールドエネルギーは1200…第4世代機…世界中ではやっと第3世代機の試作品が運用され始めた筈…」

織斑先生が白式の驚異的なスペックを読み上げていく。

「この他にも、攻撃、防御、機動性、武器等も調べましたが、どれも驚異的な性能です。しかも……」

「どうした、山田君？」

「使用されているコアは… No. 468とありました…」

「…そうか、天空寺」

「は、はい！」

いきなり呼ばれ、少し声が裏返った。

「お前はさつき『僕のコア』と言ったな。つまり白式は謎のコアで稼働し、お前は男だがISが使える。そういう事だな？」

「…はい」

そう言うのと山田先生と織斑先生は僕に聞こえない声で話始め、2分位経った時にまた向き直った。

「天空寺、ISが使えるなら分かんと思うがISは女しか使えない。だがお前は使える。今の立場が分かるか？」

「…世界中から狙われる危険が高いんですね？」

僕は答えた。それ位、インフィニット・ストラトスを読んでいれば分かる。

「そうだ。そこで提案がある。ここに入学しろ。そうすれば三年間は世界中の機関等はお前に手出し出来ん」

「…分かりました。そうさせてもらいます」

どうせ入学するつもりだったから好都合だ。

「なら話は早い。しかしタダで入学は許可できんぞ。一応ここは学校だからな。山田君、天空寺を第3アリーナに案内してくれ」

「はい！じゃあ天空寺君、私についてきて下さい」僕は白式を受け取ると、山田先生についていき、その場を後にした。

10分位歩くとアリーナに到着した。

「じゃあここで少し待ってて下さいね」

そう言うて山田先生は立ち去っていった。

待つこと15分、突然空を切る音が聞こえ、振り向くとラファールを纏った山田先生が居た。

「天空寺君、お待たせしました」

「山田先生、これは一体…？」

「これから天空寺君には、私と模擬戦をして貰います。その内容と

結果で入学を判断したいと思います」「成る程、テストみたいな物ですか」

「そういう事です。あ、負けたからって必ずしも不合格になる訳じゃ無いですからね」

さつき結果って言わなかったか…？

そんな疑問を抱きつつも、ガントレットを構え、意識を集中する。

（行くぜ、白式！）

次の瞬間、全身が光に包まれ白をメインカラーにしたアーマーが展開した。

山田先生を見ると既にライフルを展開していた。

僕は武器をイメージする。すると右手に刀型の武器、雪片式型・改を展開して持ち、左手にライフル兼シールドのシールドライフルを展開した。

『ではこれより、模擬戦を始めます。』

アナウンスが流れ、僕は武器を構えた。

『それでは…始め！』

スタートの合図が響いた瞬間、山田先生が両手のライフルを連射した。

僕はそれを移動して回避するが、山田先生は僕に向かって連射を続けている。

その弾幕を掻い潜り、僕は反撃に出る。

「此方からも行きますよ！」

左手のシールドライフルからビームを放つ。

山田先生は連射を中断し、ビームを回避する。

僕は連射が止んだ瞬間、イグニッションブーストで接近し、雪片で斬りかかる。山田先生はライフルをしまい、展開した近接ブレードで受け止めた。

「まだ此方がありますよ！」

僕はシールドライフルからビームサーベルを展開し、斬りかかった。「ライフルから剣が！？」

山田先生は多少は驚いたが、サーベルをブレードで受けた。その瞬間、左側がから空きになった。

「そこだ！」

バリアー無効化を発動し、雪片を降り下ろす。その瞬間、ラファールの絶対防御が発動した。

「くっ！？」

今の一撃が効いたのか、山田先生はサーベルを押し返し、距離をとった。

先生は近接ブレードを収納し、今度はスナイパーライフルのようなライフルを展開した。

「まだやられませんよ！」山田先生はライフルを二連射する。

先程より弾は少ない。しかし威力は桁違いだ。

放たれた二発は回避したが、山田先生が絶えず弾丸を放ってくる。

しかも一番反応の薄い所を狙ってきているので油断が出来ない。

（あのライフルは銃身が長いな…となると取り回しはきつい筈！）

何発目かの弾丸を避け、山田先生に向かって白式を加速させた。

「うおおおおお！」

「っ！」

ライフルから放たれる弾丸を紙一重でかわし、更に接近する。

山田先生との距離が8メートル切った時、シールドライフルのスタンランサーを二発発射した。

それと同時に左に移動して接近を続行する。

そして、先生がライフルを放った瞬間、残り1つのスタンランサーを放った。

先程の2つは山田先生の注意を向ける為の囮。

本命は今放った方だ。

囮のスタンランサーは撃ち抜かれて爆発したが、本命のスタンランサーがライフルに突き刺さった。

スタンランサーから青白い電流が流れ、ライフルが爆散する。

「きゃあっ！？」

爆風をもろに喰らった山田先生の懷に僕は飛び込んだ。

「貰ったああ！」

シールドライフルを収納し、雪片を先生に降り下ろしてそこから右斜め上に斬り上げる。

更にそこから体を一回転させ、勢いを付けた雪片で一閃した。

その瞬間、ビーツという音がアリーナに響いた。

『シールドエネルギー、エンプティー。模擬戦を終了します』
それを聞いた僕は雪片を収納する。

「凄いですね、天空寺君」「山田先生も強かったですよ」

「そ、それほどありません……」

微笑むと何故か山田先生が顔を赤くしていた。

その時、山田先生に通信が入り、それに応答する。

通信が終わると山田先生が僕に向き直り微笑んだ。

「天空寺君、テストは合格ですよ」

「いよっしゃあ！」

思わずガッツポーズを取る。

「ただ……」

「ん？なんですか？」

「実は……今の戦いで天空寺君の实力がかなり高い事は分かったんですが……それを見ていた織斑先生が本当に実力が有るか確かめる為、天空寺君と戦いたいと……」「……へ？」

戦う？織斑先生が？僕と？初代ブリュンヒルデと？

「……マジですか？」

そう呟くと山田先生が苦笑いしながら頷いた。

第1話 舞い降りるイレギュラー（後書き）

感想等お待ちしております！

第2話 女神と戦士（前書き）

少し短めです。

第2話 女神と戦士

「蒼太SIDE」

テストに合格した喜びもつかの間、

僕の戦いを見ていた織斑先生が僕と戦う事になった。

あの初代ブリュンヒルデに輝いた織斑千冬さんと。

山田先生と入れ替わるように打鉄を展開した織斑先生が現れた。既に右手には近接ブレードを構えている。「待たせたな、天空寺」

「織斑先生……」

「山田君から聞いた通り、テストは合格だ。しかしお前を見ていたら私もお前と戦いたくなかった。悪いが付き合って貰うぞ、天空寺」少し無茶苦茶な理由にも聞こえるかもしれないが、僕も先生の気持ちにはなんとなく分かった。

真の強者と出会った時に感じる胸の高鳴り。

戦士であればより強い者と戦うのは本望と言っているかもしれない。恐らく先生は僕の戦いを見てそれを感じたのだろう。そんな事を考えていると、織斑先生が近接ブレードを構えた。

それに呼応するように右手の雪片式型・改、左腕のシールドライフルを構える。『では、試合を開始します。……始め!』

開始の合図と同時に、先生がイグニッションブーストで僕に急接近し、近接ブレードを降り下ろした。

それを雪片で受け止めるが、その威力は今までに無い位重かった。

「ぐっ!?!」

一瞬たじろいだ僕に近接ブレードの連続攻撃が叩き込まれる。

雪片とシールドライフルで防いでいるが、それでも少しずつシールドエネルギーが削られていく。

「くっ……!」

一度先生から距離をとり、ライフルと雪片のバルカンで遠距離から攻撃を仕掛ける。

しかし、織斑先生はそれをかわしきり、突進してきた。

「これなら！」

そこへスタンランサーを全て発射する。

だが先生はすれ違い様にスタンランサーを両断し、突進を継続する。

「マジかよ！？でも…まだだ！」

ライフルからサーベルを展開し、打鉄を迎え撃つように突進する。

「やあああつ！」

雪片とサーベルによる斬撃を時間差で繰り出す。

しかしどちらも近接ブレードで弾かれてしまい、がら空きになった僕の懷に斬撃が叩き込まれた。

「があつ！」

「ふっ！」

そこから突きが僕の胸に放たれ、白式の絶対防御が発生する。

「はあっ！」

追い打ちをかけるように先生が放った切り上げを僕はまともに喰らった。

「うわあああああつ！」

そのまま僕は地面に叩き付けられた。

「ぐっ…っっ…」

すぐ起き上がり、白式の状況を確認する。

シールドエネルギーの残量は301。

実体ダメージ小。

武器は雪片とシールドライフル、共に健在だがダメージ小有り。

ミサイルポッド異常無し。武器はともかく、白式はかなりダメージを負っていた。

（これが…ブリュンヒルデの実力…！）

僕は思い知らされた。これが世界最強となった者の実力なのだと。

僕はどこか自分の力を慢心していたのかもしれない。いくら白式が高性能でも、搭乗者である僕がこんな風では意味が無い。

（ごめんな、白式）

白式に心の中で謝る。

前方には織斑先生が地上に降りていた。

「あの攻撃を耐えきるとはな。さすがと言ったところか」

「…織斑先生」

「なんだ？」

「僕は、先生という強い人と戦って自分が慢心をしていた事が分かりました」 「……」

織斑先生は黙って聞いている。

「先生は凄く強いです。はつきり言って勝てない可能性が高いです。でも…僕は貴女に勝ちたい！世界最強の貴女に！1人の戦士として！！」

「…そうか。なら、お前の力、見せてみる！」

そう言って近接ブレードを構え直した。

「はい！来い！幻龍、強龍！！」

そう言くと両腰に日本刀が展開し、それを抜き去る。右手に氷と雷の力を司る幻龍、左手に風と炎の力を司る強龍を構え、ミサイルポッドを収納して機動性を上げる。

「行きます！」

イグニッションブーストで急接近し、幻龍を降り下ろす。先生は近接ブレードで受け止めたが、そこに強龍を叩き込む。

「っ！」

先生は幻龍を払い、強龍を受け止めた。

「そこだあ！」

僕は白式の右足でミドルキックを放つ。

「なっ！？」

いきなり格闘に移項した事に戸惑ったのか、強龍を払って距離をとろうとしたが、間に合わずミドルキックが炸裂する。

「ちいっ！」

「うおおおお！」

そこへ幻龍と強龍による連続攻撃を加える。

切り上げ、切り下げ、突き等を入り混ぜた斬撃を織斑先生に叩き込

む。

織斑先生は近接ブレードで必死に防いでいるが全てを防ぎきれない訳でも無く、何回か攻撃が入った感触が伝わった。

「ふっ！」

先生が隙を見つけて近接ブレードを降り下ろす。

「まだっ！」

僕はバックステップで近接ブレードをかわし、隙だらけになった先生に突進した。

「これで終わりだあああ！！！」

幻龍と強龍に気を込めると、幻龍の刀身が青い輝きを、強龍の刀身が赤い輝きを放った。

「必殺！双龍斬！！！」

幻龍と強龍でXを描くように斬撃を放つ。

双龍斬が決まった瞬間、ブザーが鳴り響いた。

『シールドエネルギー、エンプティー。勝者、天空寺蒼太』

その瞬間、僕の勝ちが決まった。

「…か、勝った？」

「そうだ。お前は私に勝ったんだ」

振り向くといつの間にか織斑先生が居た。

「や…やった…」

世界最強の織斑先生に勝ったという事を理解すると、体から力が抜けた。

「お、おい、大丈夫か？」倒れる直前に織斑先生が受け止めてくれた。

「す…すみません。力が入らなくて…」

そう言うと白式が解除された。

「仕方ないな。よつと」「え？うわあ！？」

織斑先生がいきなり僕をお姫様抱っこした。

「先生！？一体何を！？」

「力が入らないのdarou？私が運んでやる」

そう言つて織斑先生は僕を運んでくれた。

ちなみに、運ばれている間は先生の体温や感触を感じて胸がドキドキしていたのは内緒だ。

その後僕は、入学までの間は先生が用意してくれた予備の教員室を使う事になり、部屋に着くとシャワーを浴びて直ぐに眠りについた。次の日からは、織斑先生にと山田先生による特別授業を受けた。

しかし、その日の昼頃から何故かマスコミ等が殺到した。

仕方なく、少しインタビュアーに答えたりはしたが、それ以外の機関等は織斑先生が追い払ってくれた。

だがインタビュアーに答えた事で僕は、世界初の男性操縦者としてテレビで紹介されてしまった。

まあ、あまり僕は気にしなかったけど。

そんな内にゴールデンウィーク最後の日になった。

「いよいよ明日からか…」織斑先生に貰った制服を見ながら呟く。

その後、カバンからセイントカプセルを取り出した。まだカプセル上部に光は灯っていない。

「今はまだでも…絶対真のガンダムになってやる！」僕は決意を口にする、セイントカプセルをしまい眠りについた。

第3話 転入！IS学園！！（前書き）

今回から原作の第1巻に入りますが、まず最初に下の設定をご覧ください。

- ・現時点での1年1組のクラス代表はセシリア。
- ・鈴が既に転入している。
- ・クラス対抗戦にゴーレムが乱入していない。

以上、設定でした。

第3話 転入！IS学園！！

「蒼太SIDE、1年1組前廊下」

遂にこの日が来た。今日からIS学園での日々が始まる。制服を着た僕は、織斑先生が担任する1年1組に転入する事になった。

「では天空寺、私が呼んだら入って来い」

「はい」

そう言うのと織斑先生は教室に入ってしまった。

それから15秒後、

「入って来い」

先生の声が聞こえ、僕は教室に入り、教卓の横に立った。

「はじめまして、天空寺蒼太です。趣味は読書とゲームです。これからよろしく願います」

自己紹介し、ペコリとお辞儀をする。

「…き」

来るな、“あれ”が。

キューピーン！という感じが頭に流れ、僕は素早く耳を塞いだ。

『きゃああああああー！っ！！！！！！』

出たよ、衝撃波並の黄色い声援。

「本当に来た！史上初の男性操縦者！！」

「このクラスに来るなんて…神様、ありがとう！！」

「しかもテレビで見たよりカッコイイ！！」

「生きてて良かった…」 女子達が口々に黄色い声援を上げる。

「こら、静かにしろ。天空寺、お前の席はあそこだ」織斑先生の一言で一気に静かになり、僕は先生が指差した席に座る。

「やっぱりか…」

その席とは最前列の真ん中、つまり教卓の真ん前である。

それから先生が幾つか話をして朝のSHRが終わった。

それから授業が始まったが、あの電話帳のようなテキストを暗記し

ていたので特に困る事も無かった。

「昼休み、食堂」

昼になり、今は食堂で昼飯を食べている。

周りの女子が先程から見ているが、特に気にしない。「うまいな」

今食べているのは鯖の塩焼き定食。

やはりごはんは魚の相性は良いな。

「て、天空寺君」

「ん？」

突如前から声が聞こえ、見ると3人の女子がトレーを持ち立っていた。

「隣、良いかな？」

恐る恐る声を出すようにその中の1人が僕に聞いてきた。

「ああ、良いですよ」

そう言うのと聞いてきた女子が安堵の溜め息を漏らした。後ろの2人は小さくガッツポーズをしている。

3人が座ると周りが少しざわついた。

とりあえず無視しとこう。「天空寺君ってそんなに食べるの？」

向かいに座った女子が聞いてきた。

今はごはんは味噌汁、それに鯖が2杯目（2匹目）だ。確かに女子から見れば多いと思う。

「まあこれくらいは普通ですよ」

「そ、そうなの？」

「その気になれば、定食3人分は食べれますよ」

「さ、3人分!?」それを聞いた女子が驚愕の声をあげた。女子で一度に定食3人分を完食する人なんか普通いないからな。

その後は女子達と少し話をしながら昼飯を終えた。

「1年1組」

教室に戻ってきた僕は席につくと、鞆から教科書とノート、それに

筆記用具を出した。

「ちよつとよろしくて？」「はい？」

その時、いきなり声を掛けられた。その方を向くと鮮やかな金髪で青い瞳の女子、セシリア・オルコットが居た。

その雰囲気から高貴な感じがした。

「あの、何か……？」「まあ！なんですよ、そのお返事は！イ

ギリスの代表候補生であり、この1年1組のクラス代表であるこの私、セシリア・オルコットに話し掛けられただけでも光栄なのでしょ！？それ相応の態度というものがあるんではなくて？」

わざとらしく声をあげるセシリア。その態度に少しムツとする。

この世界、インフィニット・ストラトスにはこの人みたいな女が世の中にはゴロゴロ居る事だろう。

ISの性能は凄まじく、それを使える者は国家の軍事力になる。

更にISは女にしか使えない。だから女は偉い。

その為、ISが使えない男の立場は劇的に下がり、今や、只の労働力位にしか思われていない。

無論、男も黙ってはいない。しかし、誰も反抗出来ない。

ISに勝てないからだ。

例え、戦闘機、戦車、軍艦といった兵器もISの前では鉄屑に過ぎない。

それほどまでにISは強いが、その力を振りかざすなんてのは只の暴力だ。

「つまり、貴女はエリートと言う事ですか？」

「そう！エリートなのですわ！」

そう言ってビシッと僕を指差す。

人を指差すのは止めた方が良いでしょう。欧米では大変失礼な事ですから。

「本来ならば私のような選ばれた人間とクラスを共に出来るだけでも奇跡なのですよ？もう少し現実を理解して頂けません事？」

「成程、確かにミラクルですね」↑棒読み

「…馬鹿にしていますの？」

「貴女が奇跡だって言っただんでしょ？」

「ふん。まあ

でも？私は優秀ですから貴方のような人間にも優しくしてあげます
ことよ？」

これの何処が優しさだ。

「結構です」

「なっ！？貴方、この私が優しくしてあげると言っているのに、そ
れを断りますの！？」

「はい」

「なっ…」

即答するとセシリアは目を見開き驚いている。

「あ、貴方という人は！！」キーンコンカーンコン。

何か言いかけた時にチャイムが割って入った。

「っ！またあとで来ますわ！逃げない事ね！よくって！？」

そう言つて席に戻るセシリア。

教室のドアが開き、織斑先生と山田先生が入ってきた。

「ああ、授業を始める前に諸君らに言っておく事がある」

織斑先生が教卓に立ち、思い出したように言った。

ちなみにその山田先生は少し横に立っている。

「この1年1

組のクラス代表はオルコットだが、学園の事情で急遽変更になった」

「……え？」

僕以外の女子が声をあげた。

「オルコットに代わる代表は天空寺。お前だ」

織斑先生が僕を見ながら言った。

「…は？」

僕がクラス代表？マジで？そんな事を考

えていると、バアンツ！

いきなり机を叩くような音が響き、見るとセシリアが明らかに納得
出来ていない顔で立ち上がっていた。

「納得いきませんわ！何故代表候補生である私がクラス代表から降
ろされなければなりませんの！？」

「オルコット、気持ちは分かるがこれは学園の決定事項だ。お前が掛け合つてどうにか出来るものではない」

「だからと言つて、何故私の代わりがこのような極東の国の猿ですの！？」

「……何だと？」

「良いですか、實力からいけば私がクラス代表になるのは必然。それを物珍しいという理由で変えられては困ります！大体、文化としても後進的な国で暮らさなくていけないこと自体が、私にとっては耐え難い苦痛でー」

「いい加減にしとけよ、イギリス野郎が。イギリスだつて古いくらいしかお国自慢ねえじゃねえかよ」

「なっ……！？」 キレた僕はわざと聞こえるように言つた。祖国を侮辱されて黙つていられるかつてんだ。

「あつ……貴方ねえ！私の祖国を侮辱しますの！？」

セシリアは右手で僕を指差しながら言つた。

その前に、いい加減、人を指差すのを止める。

僕は体から殺気を放ち、セシリアを睨み付けながらゆっくりと立ち上がった。その瞬間、クラスの殆どの女子と山田先生は殺気に怯え涙目になり、織斑先生も冷や汗を掻いていた。

セシリアも恐怖で体を震わせていたのが体から発せられる気で感じ取れた。

「てめえだつて自分の祖国を侮辱されたら怒るじゃねえかよ。それとも何か？てめえは自分がされて怒る事を、他の人間には平気でやるのか？もしそうだとしたらてめえは最低だな」

心で思つていた事をぶちまける。するとセシリアは怒りで顔を真っ赤にし、言い放つた。

「決闘ですわ……！」

机をバンツ！と叩く。

いちいち机を叩くのも止める。

「良いぜ。口で言うより分かりやすいからな」

「言っておきますけど、あれほど私を侮辱しておいてわざと負けたりしたら、私の奴隷にしますわよ！」

「悪いが、僕は真剣勝負で手加減出来る程器用じゃなし、そんな事をするつもりもない」

「随分自信がお有りのようですね？ですが、私は心が広いので特別にハンデをつけてもよろしいですわよ？」

「これは真剣勝負だ。ハンデなんかいらん」

そう言うのと怯えていた筈のクラスの女子が爆笑した。「天空寺君、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのなんて、大昔の事だよ？」

「天空寺君はISが使えるかもしれないけど、セシリアは代表候補生なんだよ？」「皆さんの言う通りですわ！何せ私は入試で唯一教官を倒したエリートですからね！」

女子は本気で笑いながら、セシリアは勝ち誇ったかのような風に僕に言った。

「僕は山田先生を倒しましたけど？」

「…は？」

僕がそう言うのとセシリアは鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をしていた。

「私だけと聞きましたか…？」

「どうせ女子だけではってオチですよ。後、僕はもう1人先生を倒しました。そして、その先生は今ここに居ます」

そう言うのと爆笑していた女子達が静まり返る。

その目線が一点に向けられた。この教室に居る山田先生以外の先生。それは1人しかない。

「…まさか千冬姉様？」

「て、天空寺君。冗談が過ぎるよ。いくらなんでも千冬姉様に勝つなんて…」

「いや、天空寺の言っている事は事実だ」

『ええっ！？』

織斑先生が信じきれない女子に言った。

「天空寺の言う通り、私は負けた。信じられんかもしれんが事実だ。その証拠も残っている」

先生がそう言うのと女子達がざわめきだした。

「…嘘でしょ」

「あの千冬姉様を倒した？」

「世界最強と呼ばれた…千冬姉様を…？」

「まあ、そう言う事です。もう一度言いますが、ハンデはいりません」

今度は納得したのか、誰も笑わなかった。

「…ではハンデはお互い無しと言う事にしてあげますわ」

「決まったようだ。では金曜日の放課後、第2アリーナで模擬戦を行う。良いな？」

「はい」

「分かりましたわ」

「それと天空寺。いい加減殺気を放つのは止めろ」 「…はい」

織斑先生に指摘され、僕は殺気を放つのを止めた。

「では、授業に入る！」

それから何事も無く、普通に授業が進み、あっという間に放課後になった。

く屋上へ

放課後、織斑先生に屋上に呼ばれた。

「なんですか、先生？こんな所に呼び出すなんて」「決まってるだろう。お前についてだ。先程のお前の殺気は尋常では無い。あれは一体何なんだ？」

「…分かりました、話しますよ」

僕は先生に自分の特異体質について話した。

気の事や、特異体質によって周りから気味悪がられた事、それによっていつの間にか殺気が尋常では無い物になった事等、殆どの事を話した。

「…代々の事は分かった。いささか信じれんが、現にお前がそうなのだから信じるしかあるまい」

織斑先生は話を聞いても平然としていた。 「…気味悪がらないんですか？」

「私を侮るな。少なくとも、私はお前に特異体質が有ろうが無かるうが、私の生徒の１人だと言う事に変わりは無いと思っている」

その言葉を聞いた僕は凄く嬉しかった。 いつの間にか目から涙がこぼれ落ちる。

「先生…ありがとうございます…」

「その力、使い道を誤るなよ」

「はいっ！」

涙を拭い、僕は元気よく答えた。

「だが、１つ言っておくぞ。不用意に力を使うなよ？」

織斑先生が優しい表情からいつもの冷徹な表情に一変し、僕に言った。

その言葉を聞いた時、冷や汗が流れた。

「は、はい…」

僕はこの時、織斑先生を怒らせないようにしよう、と心に誓ったのだった…

第4話 白と青の邂逅

く 蒼太SIDE 金曜日、ピットく

転入初日からあつという間に時間が流れ、決闘の日になった。ピットのモニターには既にISを展開しているセシリアの姿が映し出され、観客席には学年を問わず、女子が詰め掛けている。「行くか。」左腕のガントレットに意識を集中し、0、3秒後、白式が展開した。そのままカタパルトに向かい、準備が完了する。

「先生、準備完了しました。」

『了解しました。ハッチをオープンします。』

山田先生がそう言うのと、前方のハッチが開いていく。ハッチが開き切り、発進しようとするのと、通信が入った。

『蒼太。』

「あれ？ 篤さん、どうしましたか？」

あの篠ノ之博士の妹である篤さんから通信が入った。え？ なんて篤さんが居るのかって？

実は一昨日、放課後、幻龍と強龍で素振りをしていた所に偶然篤さんが通り掛かった。僕がそれに気付いて用件を問うと、篤さんは真剣を構えて『手合わせをしてくれ。』と言った。僕には断る理由も無かったのでそのまま篤さんと勝負をした。

結果は僕の勝利で終わった。でも何故か、その時名前で呼ぶのを許してくれた。理由は『一度剣を交えれば、その者の剣から本質が分かる。お前の剣からはとても優しく、それでいて力強い感じがした。真の剣士に相応しい男だ。』との事らしい。それから篤さんが僕に挨拶をしてくれたり、話し掛けてくれるようになった。

多分友達になったんだと僕は思う。

そう言う訳で、篤さんはピットに居る。

『気を付けてな……』

「分かってますよ。」

第さんに応え、僕は少し屈んで発進体勢に入る。

「天空寺蒼太、白式、行きます！」

ガンダムシリーズのお決まりの台詞を言い、僕はカタパルトからアリーナに飛び出した。

「アリーナ」

「な、なんですよ、そのISは!？」

僕がアリーナに出撃するとセシリアが白式を見て驚愕していた。

「これが僕の専用機、『白式』です。」

「白式……聞いた事の無い名前ですわね……って！貴方、専用機持ちでしたの!？」「そうですよ。言ってませんでしたっけ？」

「聞いてませんわよ!……まあ、良いですわ。この私の実力を示す良い機会には違いませんか。」

『警戒、敵IS操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティロックの解除を確認。』

セシリアがそう言うのと白式から敵のIS、ブルー・ティアーズの情報が告げられた。

僕は意識を集中し、雪片式型・改とシールドライフル、ミサイルポッドを展開する。

「ではそろそろ……」

『警告！敵ISが射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。』

「お別れですわね！」

セシリアが持っていた大型ライフルから青い閃光が放たれる。

だが僕はその少し前、白式が警告を告げた時にシールドライフルからビームを放っていた。

2つの銃口から放たれたビームは互いにぶつかり、相殺され、消滅した。

「なっ!？ビームを相殺させた!？……いえ、まぐれに決まっていますわ！」

ブルー・ティアーズから4つの青い金属板のような物、ビットが射出され、ビームを放ちながら僕に向かってきた。

「さあ、踊りなさい！私、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でるワルツで！」

4つのビットから放たれるビームの嵐が白式に迫る。「悪いですけど、ファンネルタイプはあっちの世界で見慣れてんですよ！」

僕は右上から放たれたビームを少し移動して回避する。今度は正面から放たれたビームを直撃コースにあった自分の左腕を上げて回避した。

次々と放たれるビームを僕は必要最低限の動きで回避する。

無論、時には大きく移動するのも大事だが、ファンネルタイプから放たれるビームの中で無駄に動くのは自殺行為に等しい。

頭を動かしたり、腕をあげたり、足を曲げたりという、最低限の動きでビームをかわし、僕は反撃に出る。ライフルからビームをセシリアに放った。

そのビームは回避行動によって、命中しなかったが、その時、ビットのビームが止んだ。

「そこっ！」

雪片からビームバルカンを砲撃を中止したビットの1つに放つ。

ビットにバルカンが命中し、爆発した。

「やはりか。」

ブルー・ティアーズの弱点は原作通りだった。

セシリアが命令を送らないと稼働出来ない。

そしてその制御に集中する為、セシリアはその時ビット以外の攻撃が出来ない。先程、ビットのビームが止んだのは、回避行動を取る為に集中力が乱れたからだ。おまけにあのビットは射撃のみ。ケルデムのシールドビットの防御機能や、リボーンズガンダムのフィンファンングに搭載されているビームソード等は一切無い。

だからセシリアの集中力が途切れた時は只の金属版と同じだ。

「そらっ！」

雪片とビームサーベルで2つのビットを切り裂く。

残り1つになったビットから放たれるビームを回避し、ライフルのビームで破壊する。

「4つ！これで全部だ！」僕はブルー・ティアーズに向け、突進する。

大型ライフルのビームを回避しながら、敵機との距離を詰めていく。剣の間合いに入り、雪片を振り下そうとしたその時だった。

「かかりましたわね、ブルー・ティアーズは6機ありましてよ！」セシリアがにやりと笑った。その直後、腰のスカートアーマーの突起が外れ、僕に向いた。

そして、ミサイルタイプのビットが僕に発射された。「砕け散りなさい！」

2つのミサイルが僕に迫る。

「ワンオフアビリティー、発動。」

僕は小さく呟き、ワンオフアビリティーを発動させた。雪片式型・改の刀身が左右にスライドして白い刀身があった空間に蒼い刃が形成された。

その蒼い刃とは白式のワンオフアビリティー、『零落白夜』によって形成された光の刀身。

真横に一閃すると蒼い閃光が走る。

ミサイルは蒼い閃光を中心に真つ二つになり、そのまま慣性の法則に従って後ろに流れて行き、爆散した。「ミ、ミサイルが！？」

セシリアが一瞬たじろいだ。その隙を逃さず、僕は白式をブルー・ティアーズに向けた。

「ま、まだですわ！」

大型ライフルからビームが放たれ、僕に向かってくる。

「無駄だよ。」

そのビームを雪片で切り裂くように振り抜く。

零落白夜の刃に触れたビームが消滅した。

「な！？」

「喰らえ！」

両脚のミサイルポッドから8発のミサイルを放つ。その攻撃をセシリアは大型ライフルで迎撃する。

それによって4発のミサイルが破壊され、残りの4発は回避された。その回避先に僕は飛び込んだ。

「おおおおっ！」

一気に懐に入り、零落白夜を展開した雪片を振り下ろす。

零落白夜により、シールドバリアーが消滅し、絶対防御が発生した。

「！？絶対防御が！？」

驚愕しているセシリアにシールドライフルを突き付けた。

「はっ！？しまっ！」

「フィニッシュだ。」

僕は躊躇わず、ビームとスタンランサーを零距离で放つ。装甲が無い部分にビームとスタンランサーが命中し、又もや絶対防御が発動した。

その瞬間、決着を告げるブザーが鳴り響いた。

『シールドエネルギー、エンプティー。試合終了。勝者、天空寺蒼太。』

「終わったか。」

勝敗を確認した僕は、シールドライフルとミサイルポッド、雪片式型・改を収納する。観客席から黄色い声援があがっているがとりあえず適当に答え、そのままピットに戻った。

くピットく

「ふう、終わった。」

白式を解除し、一息付く。「天空寺君、凄かったですよ！」

「流石は私が認めた男だ！」

山田先生と篤さんが僕にお褒め(?)の言葉をくれた。「どうも…」

僕は簡単に答える。はつきり言ってもう寝たいです。そのまま僕は着替えて部屋に戻ろうとしたが、そうは問屋が下ろさなかった。

道中で女子達に取り囲まれ、質問やら取材やらの嵐を受け、自室に

辿り着いたのは試合が終了して2時間後だった…

「蒼太SIDE OUT」

「ナレーションSIDE、上空」

蒼太とセシリアの模擬戦が行われていた第2アリーナを見下ろすように、“それ”は佇んでいた。

黒い装甲のISを纏っている男。髪の毛は茶髪で、瞳は蒼太とは対照的に真っ赤なルビーのような色だ。

「…ああ、分かっている。これより帰還する。」

男は通信を切り、先程の蒼太とセシリアの模擬戦を記録したデータを見た。

それには蒼太が重点的に記録されており、男は映し出された蒼太を睨み付けた。「天空寺蒼太…俺は貴様を認めない…！」

怒りに満ちた声をあげる男。黒い装甲のISを纏っているその手には金色で、赤い光のラインが刻まれたのテニスボール位の大きさの物体が握られていた。

第4話 白と青の邂逅（後書き）

オリキャラを登場させてみました。
感想等お待ちしています。

第5話 鈴との戦い！そして新たなる来訪者（前書き）

遅くなりました。

今回は急展開です。

第5話 鈴との戦い！そして新たなる来訪者

「蒼太SIDE、蒼太自室」

「っ、疲れた…」

女子達の包囲網から解放され、僕は自室である1036号室に戻り、ベッドに体を投げ出した。

「まさか質問攻めに会うとは…まあ試合に勝ったけど」

その時、盛大に腹の虫が鳴った。

「腹減った…そう言えばまだ飯食ってねえな…」

食堂に行こうと体を起こし、ドアを開ける。

「わっ!？」

「え!？」

ドアを開けると何故か箒さんが居て、鉢合わせになった。

「ほ、箒さん…?どうしたんですか？」

「え!?!いや、その…蒼太がまだ夕食を取っていないと思ってだな。もし良ければ一緒にとまって…」

もしかして箒さんは僕の事を見ていたのか？

「別に良いですけど…」

「そ、そうか!なら行くでしょう…///」

そう言っただけで僕の手を握った。

（なんで手を繋ぐんだ？）

そのまま箒さんと手を繋いだまま食堂に向かったが、廊下や食堂で女子達に騒がれたのは言うまでも無い…

「食堂」

周りのざわめきは無視して、今は箒さんと食事中。

僕は牛丼で、箒さんはざるそばだ。

「あの…蒼太、お前は何者なんだ？」

「え？」

「今日の模擬戦を見ていたが、明らかにお前の動きは普通とは違う。」

こないだの剣さばきもそうだ。お前は一体何なんだ？」

篤さんが僕に質問する。

「…剣については、小さい頃から教えて貰ってたからです。ISについては…すいませんが、今はまだ教えられません」

「…そうか」

篤さんは一応納得したようだ。

「ちよつと良いかしら？」「…ん？」

突然声を掛けられ、篤さんと同時にその方向を振り向く。

声がした方には、原作の主人公、一夏のセカンド幼馴染み、凰鈴音が立っていた。

「凰鈴音…」

「知ってるんですか？」

本当は知っているが、神様に原作の事を話してはいけない、と言われたので、あえて知らないフリをする。「ああ。彼女は凰鈴音。2組のクラス代表で中国の代表候補生だ」

「そう、私が2組のクラス代表。1組の代表はセシリアからあんたになったのよね？天空寺蒼太」

「そうですけど、何か？」「単刀直入に言うわね。私はあんたに決闘を申し込む！」

「…は？」

僕に決闘の申込み？

「何故ですか？僕と戦う理由は無いと思いますけど？」

「私には有るの！代表候補生でも無いアンタはセシリアを倒した。つまり、アンタはセシリアより強いって事でしょ？」

「……つまり、セシリアさんを倒した僕の実力を確かめたいと？」

「分かってるなら話は早いわ。で、決闘は受けるの！？」

若干無茶苦茶な気もするが、とりあえず返事を返す事にした。

「別に良いですよ。日時はどうしますか？」

「受けるのね！時間は明日の午後2時、場所は第3アリーナよ。逃げないでよね！」

そう言うと鈴は立ち去っていった。

「蒼太、大丈夫なのか？お前は知らないと思うが、4月のクラス対抗戦で鈴はセシリアと引き分けているんだぞ？」

篤さんが心配そうに尋ねる。対抗戦は引き分けだったのか。

「まあ、なんとかありますよ」

「なんとかって…」

僕の返事に篤さんは若干呆れていた。

（蒼太自室）

「ああは言ったけど、少しは対策をしなきゃいけないな」

篤さんと別れ、部屋に戻った僕はパソコンを開き、白式の調整を始めた。

「龍砲の対策としてとりあえず機動性を上げて、射撃武器の威力も少し上げるか」

キーボードを操作して白式を調整する。

その後、10時まで白式の調整を続行した。

（翌日、第3アリーナ、ピット）

…1つ言いたい。

「何処の世界も女子のネットワークは凄まじいな…」決闘の約束は昨日の夜だった筈。

それにも関わらず、アリーナの観客席はほぼ満席。

その中にはセシリアさんも居た事がモニターで確認出来た。

「女子のネットワーク…恐るべし…」

「何をぶつぶつ言っているんだ、蒼太？早く準備した方が良いぞ。」

「分かってますよ」

篤さんに促され、僕は白式を展開する。

「頑張れよ」

「了解です」

篤さんに軽く答え、僕はアリーナに飛翔した。

「天空寺蒼太、白式、行きます！」

くアリーナ」

アリーナに飛び出すと、IS、『甲龍』を展開した鈴の姿が目に入る。

僕は雪片式型・改、シールドライフル、ミサイルポッドを展開し、構える。

「逃げずに来たのね」

「当たり前ですよ」

「じゃあ、セシリアを倒した実力……確かめさせて貰うわよっ！」
そう言っていると鈴さんが青竜刀を振りかざし、突っ込んで来た。

「せやあああっ！」

振り下ろされた青竜刀をかわし、ライフルを放つが、かわされた。

「初撃をかわすなんてやるじゃない」

「……どうも」

「でも、まだまだ序の口なんだからね！」

イグニッションブーストで接近した鈴が両手の青竜刀で連続攻撃を放って来た。それを回避と防御で対処する。

「くっ！これなら！」

甲龍の球体状のパーツがスライドし、砲口が現れる。その武装は知っていた。

『衝撃砲』。

空間に圧力を掛けて砲身を形成し、その時に生じた余剰エネルギーを砲弾として撃ち出す武装。

砲身も砲弾も見えないのがこの武装の厄介な所だ。

だがハイパーセンサーが空間の歪みを感知したので、僕は迷わずブースターを全開にして回避行動に入った。

その為、放たれた砲弾は先程、僕が居た空間を通り抜けていった。

「嘘！？」

龍砲がかわされた事に驚愕する鈴。

そこへ僕は両脚のミサイルポッドからミサイルを放った。

鈴は咄嗟に青竜刀を盾にしたが、ミサイルは全て命中した。

「くっつ！？」

更に追撃の為に僕は甲龍に突撃した。

零落白夜を発動した雪片を甲龍に振り下ろす。

だが、切っ先が甲龍に触れる直前だった。

突如、凄まじい轟音が響き、僕は攻撃を中断した。

「え！？」

「な、なんだ！？」

地面から巨大な土煙が上がっている。

その土煙が晴れた中から現れたものを見て、僕は驚愕した。

「な、なんで……」

そこに居たのは3つの機体。

色は鈍色、薄緑、青緑。

それを僕は知っている。

鈍色はガラッゾ。

薄緑はガデッサ。

青緑はガッデス。

「なんでガデッサ達が居るんだよ！？」

僕は思わず、声をあげる。するとガデッサ達は背部からGN粒子を散布しながら空中に舞い上がる。

そのGN粒子を見て、またもや僕は驚愕する。

粒子の色が“赤い”。

赤いGN粒子を散布する疑似太陽炉。その赤いGN粒子は圧縮すると毒性が生まれる。

それを改良し、毒性を無くしたのが、オレンジ色のGN粒子を散布する改良型の疑似太陽炉。

アニメのガデッサ達にはその太陽炉が積まれている。しかし、目の前に居るガデッサ達のGN粒子はどう見ても“赤”。

つまり、目の前のガデッサ達の粒子ビーム等には毒性があると言う

事だ。

そんな事を考えていると、ガデッサが手に持っていた、GNメガランチャーを僕に向けた。

数秒後、その砲口から極太の赤い粒子ビームが放たれた。

「うわっ!？」

それを横に移動してかわすが、そこへガラッゾが両手の指からだしたGNビームクローで、ガッデスが実体剣のGNヒートサーベルを右手に持ち、襲い掛かって来た。

ビームクローを雪片式型・改で、ヒートサーベルをシールドライフルで受け止めるが、2機の出力と、突進の勢いに負け、吹っ飛ばされた。

「くっ!？」

なんとかウイングスラスタを使って、体勢を立て直す。

だが、そこへガラッゾが放った粒子ビームの散弾、GNバルカンが撃ち込まれ、更にガッデスから金属の牙、GNファングが放たれた。バルカンをシールドライフルで防ぎ、鋭角的に動くファングをかわして、雪片のバルカンとライフルのビームで反撃する。

ファングを2つ破壊したが、今度はメガランチャーの砲撃が迫ってくる。

「うおわっ!？あぶねえ!？」PICとスラスタの出力をカットし、それによって白式が落下を始める。それを利用してギリギリ砲撃をかわした。

PICとスラスタの出力を戻し、ガデッサ達を見る。

（そもそもなんでガデッサ達が居るんだ？GN粒子の色も違うし…それにあの精密な機械のような連携…ん？待てよ、精密な機械？）

「ちよつと!？大丈夫!？」

考えていると、いつの間にか鈴が白式の近くに移動していた。

「……………」

「な、何よジロジロ見て…」

（なんでガデッサ達は鈴さんに何もしなかったんだ？）

鈴さんを見ながら、僕は思う。

すると、僕達に通信が入った。

『天空寺、鳳、無事か？』『織斑先生！』

『篠ノ之から話は聞いた。直ぐにピットに戻れ。』

それは織斑先生からの通信だった。

「え、でも……」

僕は素直に先生の指示に従えなかった。

ガデッサ達は太陽炉で稼働している。

武器の威力等もISとは比べ物にならない。

おまけに敵の粒子ビームには毒性がある。

いくら先生達でもかなりの無茶があった。

『良いから早く戻れ！直ぐに部隊を』『お、織斑先生！』『こんな時に何だ！？……………何だと！？』

途中で山田先生が割り込む。織斑先生は山田先生の話を聞くと驚愕した。

「何かあったんですか？」鈴さんが尋ねる。

『…よく聞け。アリーナの遮断シールドがレベル4に設定され、全ての扉がロックされている』

「…ええ！？」

それには鈴さんだけでなく、僕も驚いた。

いくらガデッサ達にもそんな機能は無い。

もしかしたらまだ何か居るのか、と思った僕はガデッサ達が侵入して来た部分を見た。

センサーを最大にし、侵入して来た付近のデータを見る。

すると、破壊されたシールドの向こう、上空に“黒い何か”が見えた。

（あれは…！？）

これにより、僕の中に1つの結論が生まれた。

アリーナを遮断しているのは上空の“黒い何か”。

つまり、アリーナから出るには“黒い何か”を止める必要がある。

そして、それには目の前のガデッサ達を倒さなければいけない。
そうなれば答えは1つ。

雪片とライフルを構えた。「ちょっ！天空寺、アンタ何するつもり
！？」

「あいつらを倒します」「何言ってるのよ！？3機を相手にして
無事で済むわけ無いでしょ！？」

「嫌なら逃げてても良いんですよ。僕は1人でも闘いますから」

「なっ、なんですってえ！？逃げる訳無いじゃない、このあたしが
！」

そう言つと鈴さんも武器を構えた。

ガデッサ達も呼応するように構える。

「行くぞ！」

「見てなさい！あたしの實力見せてあげるわ！」

ガデッサとガッデスが突っ込んで来る。

それを迎え撃つように僕と鈴さんも敵に突っ込んだ。

第6話 白の覚醒（前書き）

遅くなつてすいません。
ではどうぞ。

第6話 白の覚醒

「ナレーションSIDE」

アリーナではガデッサ、ガッデス、ガラッゾの3機を相手に、蒼太と鈴が激戦を繰り広げている。

「このおおっ！」

鈴が青竜刀をガラッゾに振り下ろすが、ビームクローで受け止められる。

ガラッゾはそのまま押し返し、バルカンをばらまく。そして白式に接近しようとするがバルカンをかわした鈴が放った龍砲が直撃する。「逃げんじやないわよ！」鈴は青竜刀を振りかざし、ガラッゾに向かって行った。

蒼太はガッデスとガデッサの2機と交戦している。

ガッデスのファングをかわしながら撃ち落とし、ヒートサーベルを雪片で受け止め、ガデッサの砲撃をかわし、そこにライフルとミサイルで反撃する。

だが、敵機の回避とGNフィールドによる防御によって大きなダメージは与えられていない。

「だったら、フィールドをぶった切る！零落白夜、発動！」

雪片の刀身がスライドし、蒼白い光の刀身が出現する。

更にライフルからビームサーベルを出して蒼太はガデッサに突っ込んだ。

向かって来るファングは斬撃で破壊し、ヒートサーベルを振りかざしたガッデスを体当たりで吹き飛ばす。蒼太はガデッサにミサイルを放った。

8発の内、6発はメガランチャーで破壊されたが、残る2発を防ぐ為にガデッサはフィールドを展開した。赤い防壁にぶつかり、ミサイルが爆散する。

だが、それは蒼太が狙っていた瞬間だった。

「切り裂けえええ！」

零落白夜の刀身がフィールドを紙のように切り裂く。無防備になったガデッサに蒼太はビームサーベルを突き立てる。

「貰った！」

だがビームサーベルが装甲に届く直前、白式の真上から飛来した牙がザシュッと、蒼太の左の二の腕に突き刺さった。

「ぐっ、ぐああああああっ！」

焼けるような激痛が走る。その牙は先程体当たりで吹き飛ばしたガデッサから放たれた7つ目のファンング。そのファンングが突き刺さった蒼太へガデッサは真つ赤な光剣、GNビームサーベルを抜き放ち、斬撃を放つ。

蒼太は痛みをこらえ、左腕のシールドライフルを盾にしたが、ビームサーベルによって真つ二つにされ、爆散した。

「くっ、シールドライフルが！」

そこから蒼太はガデッサから距離を取り、雪片を収納する。そして自分の左腕に刺さっているファンングを掴み、一気に引き抜いた。「ぐっ！？」

その瞬間、またしても激痛が走る。

ファンングを放り投げ、ミサイルで破壊する。

そして雪片を展開する。

「はぁ…はぁ…ぐっ……」左腕の痛みに顔を歪める蒼太。

傷は白式が止血をしているが、治った訳ではない。

（参ったな…まさか絶対防御を貫通するなんて…）

本来なら、絶対防御が発動し、シールドエネルギーを削られただけですんだ筈なのだが、先程のファンングは絶対防御を完全に無視し、突き刺さった。

幸い、ファンングは先程の7つ目を合わせて全て破壊した。しかし、ガデッサのファンングに絶対防御を貫通する機能があるなら、ヒートサーベルやガデッサ、ガラッゾにもその機能が付いた武器があつて

もおかしくない。

「て、天空寺!？」

そんな事を蒼太が考えていると、いつの間にか鈴が居た。鈴は蒼太を見て驚愕している。

鈴はガラッソの反撃によつて、シールドエネルギーが半分を切り、甲龍はかなり傷付いてしまった。その為、一度態勢を立て直そうと白式の近くに移動した。

そこで、左腕に傷を負った蒼太を見て驚愕したという訳だ。

「その傷は…まさかあいつらに!？」

「これくらい…大丈夫ですよ…」

「大丈夫な訳ないでしょ!そんな状態で闘ったら死んじゃうわよ!？」

「で…でも…鈴さん1人じゃ…」

「あんたねえ!私は中国の代表候補生なのよ!みくびんじゃないわよ!もういいわ!後はあたしがやるから!あんたは見てなさい!」
そう言つてガデッサ達の方を向き、青竜刀を構える鈴。

「それにね、アンタに死んでもらうたら困るのよ」「え?」

「アンタが死んだら、決闘の決着がつかないでしょ!」

そう言つて、鈴はガデッサ達に突っ込んだ。

「鈴さん…」

「でやあああああつ!」

ガデッサ達に接近した鈴はガラッソに青竜刀を振り下ろす。しかし、ビームクローで受け止められ、そこへガデッサがメガランチャーを放ってきた。

直ぐ様鈴はビームを回避するが、そこへガッデスのヒートサーベルが振り下ろされる。

「くっ!？」

青竜刀で防ぐ鈴。だがそこにガラッソが放ったバルカンが背中に命中した。

「きゃあっ!？」

それによって、僅かに隙が生まれ、ガッデスが鈴を蹴り飛ばした。
「くううっ!？」

完全にバランスを崩された鈴に向けて、止めを差すように、ガデッサがメガランチャーを放つ。

「はっ!？」

迫る粒子ビームに鈴は思わず目を閉じる。

だが、そのビームは甲龍に届かなかった。

何かが粒子ビームと甲龍の間に割り込み、粒子ビームを消滅させた。
「…え？」

鈴は恐る恐る目を開ける。目の前には見慣れた機体が佇んでいた。
それは先程まで、鈴が居た付近に居た筈の白式だった。

粒子ビームが消滅したのは、イグニッションブーストによって間に入った蒼太が、零落白夜を発動した雪片で切り裂いたからだ。

「天空寺…あんだ、大丈夫なの!？」

「……僕は…守る」

「え？」

「誰かに守られるだけじゃない…僕は…誰かを守るって誓ったんだ…」

「天空寺…」

蒼太は静かに呟く。

蒼太は特異体質によって周りから気味悪がられた時、蒼太の叔父と叔母だけは必死に蒼太を守ってくれた。そんな叔父達を見て、蒼太は心の中で必ず“誰かを守る位強くなる”と誓ったのだ。

「白式の力…僕はそれを誰かを守る為に使う!それが僕の闘う理由だ!」

そう言った瞬間、白式が白い輝きを放った。

その輝きが白式を包む。

「な、なにこれ!？」

更に輝きが増し、まるで閃光弾が炸裂したように真っ白になる。

白い閃光が晴れると、白式の姿が一変していた。

ウィングスラスターが大型化し、4つに増えている。左腕が多機能武装腕、『雪羅』になり、更に装甲の形状が変化し、胸の部分に青色のクリアパーツが装着されていた。

「こ、これは……？痛みがない……？」

蒼太は疑問に思った。ファンングが刺さった部分の痛みが消えていたのだ。

まるで傷が治ったように。更に雪片も変化していた。鰐の部分にクリスタルが埋め込まれ、形状も若干変化している。

それは幻龍と強龍、そして雪片式型・改の三本の剣が融合した新たな剣。

その名を『龍刃・白銀ノ型』。

『第2形態に移行しました。機体名を設定して下さい。』

突如、データが表示され、機体から告げられた声が蒼太に響く。

「名前を付け直さなきゃいけないのか……？」

「天空寺！何やってんの！？前！」

「え！？」

姿が変わった時からほぼ空気になっていた鈴の声が耳に入り、言葉通りに前を見ると、ガデツサがメガランチャーを、ガラッゾが両腕のバルカンを蒼太に向けていた。

そして、メガランチャーから粒子ビームの一射が、バルカンから粒子ビームの散弾が放たれた。

「天空寺！よけて！」

「……決めたぜ、お前の名前をな」

白い機体に赤い粒子ビームの群れが迫る。

「お前の名前は“白龍神”だ……！！」

『機体名、“白龍神”。設定完了。』

そう告げると同時に、蒼太は左腕の雪羅を前に突き出す。

「零落白夜、展開……！」

そう言うのと雪羅がシールドモードになり、青白い光の壁、零落白夜

の壁が展開する。

迫りくる粒子ビームはそれにぶつかり、次々と消滅していった。全ての粒子ビームが零落白夜によって消滅すると、蒼太は純白の新たな剣を握り締め、更に雪羅をクローモードに切り替える。

「行こうぜ！白龍神！僕達の初陣だ！！」

龍刃と雪羅を構え、白龍神は3機の敵に向かっていった。

その頃、アリーナの上空では以前、蒼太とセシリアが戦っていた時と同じように黒いISを纏った男が蒼太が闘っている様子を見ていた。

「……………」

男は無言で見えていたが、次の瞬間、男は驚きを隠せなかった。その瞬間とは、白式が白く輝き、姿が変わったあの時である。

「な、なんだと！？」

男は白式の姿が変わった事に対し、驚きを隠せなかった。

「まさかこうも早く覚醒するとはな…だが、貴様は俺が必ず潰す！」

男はそう言いつと、戦闘の様子を映しているデータに目を戻した。

第6話 白の覚醒（後書き）

新たな機体の読み方は
はくりゅうじん

白龍神

です。

因みに剣の読み方は

龍刃・白銀ノ型

（りゅうじん・しろがねのかた）

です。

感想等お待ちしております。

第7話 もうひとりの転生者

〈ナレーションSIDE〉

「うおおおお!!」

アリーナで戦闘は継続していた。

蒼太はガデッサ達と闘いながら、白龍神の性能の高さを自覚している。白式を上回るスピード、雪片より威力が増した新たな剣、そして零落白夜による防御。

どれを取っても白式を凌駕していた。

だが、それによって新たな弱点も生まれていた。

ウィングスラスターの大型化と増加、雪羅の零落白夜のクロールとワールド、龍刃のバリアー無効化と言ったシールドエネルギーを消費する装備が増えてしまい、不用意に攻撃が出来なくなっていた。

その為、蒼太は極力零落白夜やイグニッションブーストを使わず、龍刃と雪羅による格闘で対抗していが、その程度でガデッサ達に勝てる筈もなく、零落白夜やイグニッションブーストを使っているのも事実だった。

ガデッサのメガランチャーをかわし、ガラッゾのバルカンを小刻みな旋回運動でよけ、ビームクローを龍刃で受け止め、ガッデスのヒートサーベルを受け流し、零落白夜の一撃を入れる。しかし、敵機は被弾箇所を巧妙にずらし、ダメージを最小限に抑えている。

「くそっ!このままじゃジリ貧だ!」

蒼太がシールドエネルギーを確認する。

残りのシールドエネルギーは1183。普通のISならとくにシールドエネルギーが尽きている。

（どうする…このままじゃいくらなんでももたない……………待てよ、確か…）

蒼太は龍刃のデータを表示し、内容を隅々まで確認する。

「これなら…いける！」

そう言っただ蒼太は新たな剣、龍刃の能力を使う事にした。

「行くぞ！白龍神！」

そう言っただ龍刃を構える。

「攻撃形態！炎皇！！」

そう言っただ、龍刃と白龍神が赤く輝き白龍神は装甲の所々と関節が赤くなり、龍刃は刀身に赤いラインが刻まれ、胸のクリアパーツと鍔のクリスタルがルビーのように赤くなっていた。

この姿こそが炎を司る白龍神の攻撃重視形態、“炎皇”。

幻龍と強龍と融合した事により、龍刃は炎、氷、雷、風の4つの力を手に入れ、各々の力を司る姿に変化する事ができ、それによって白龍神も姿を変える事が出来るようになったのだ。

「行くぜえええ！」

赤いラインが刻まれた炎の剣、龍刃・炎皇ノ型を握り締め、白龍神が突撃する。それを迎え撃つように赤い粒子ビームが飛来する。

「燃やし尽くせ！真・龍炎剣！！」

蒼太は炎を纏った零落白夜の刀身に気を

流し込む。すると、青白い刀身が長大な炎の刀身になり、それを思い切り振り抜く。

その刀身が、飛来する粒子ビームをかき消しながらガデッサ達に振り下ろされる。ガデッサ達はフィールドで防御するも、炎の刀身はフィールドを溶かし、ガデッサ達に襲い掛かった。

「やったか!？」

だが、ガデッサ達は健在していた。

フィールドが溶かされた時、回避行動に入った為、撃墜とまではいかなかったが、それでもガッデスの右腕とヒートサーベル、ガデッサの左足、ガラッゾの左腕が溶解していた。

「次はこいつだ!機動形態!風牙!」

そう言うのと赤くなった部分が緑色になり、クリアパーツもエメラルドのように緑色になり、龍刃が風を纏い龍刃・風牙ノ型に変わる。風を司る機動重視形態、風牙だ。

「このスピードについてこられるかっ!」

急激に跳ね上がったスピードで武器が無くなったガッデスに接近する。

「切り裂け!疾風十文字斬り!!」

次の瞬間、目にも止まらね速さでガッデスが龍刃と雪羅によってXを描くように斬り付けられた。

そしてその背後に白龍神が現れる。

ガッデスは胸の中央をX形に斬られ、バラバラになりながら爆発し

た。

それによって、赤いGN粒子が拡散する。

「やっぱり……」

ここで蒼太は推測は間違つてないと自覚した。

その推測とは、ガデッサ達が“無人機”ではないかという事。

先程、真・龍炎剣で敵機が溶解した時、全く痛そうな素振りがなかったり、血が一滴も流れ出なかった事等から蒼太は無人機ではないかと睨んでいた。

そして、それは当たっていた。

そんな彼に残る2機から放たれる粒子ビームが襲い掛かった。

「お次はこれだ！防御形態！氷輪！」

そう言うとう度は関節と龍刃が白に染まり、更に零落白夜の刀身が純白になる。最後にクリアパーツがダイヤモンドのように透明になり、全身が純白のその姿は氷を司る防御重視形態、氷輪だ。その形態に粒子ビームが着弾し、爆煙が起きる。

しかし、その爆煙の中から現れたのは粒子ビームが全て着弾したのも関わらず、無傷で佇んでいる純白の機体だった。

「そんな攻撃では、氷輪の防御は破れない！」

そう言うって氷の剣、龍刃・氷輪ノ型を構えてガデッサに突撃する蒼太。

放たれる粒子ビームは着弾するも、氷輪の防御力の前では掠り傷程度にしかない。

接近する蒼太に危険を感じたガデッサとガラスゾは別々の方向に退避する。

その内の、ガデッサに蒼太は追撃を加えた。

「そこだあつ！」

純白に染まった雪羅から白い閃光がガデッサに放たれる。

その閃光はガデッサの装甲には届かなかったが、ガデッサが咄嗟に盾代わりにしたメガランチャーに命中した。

そして、メガランチャーはたちまち凍り付き、バラバラに碎け散った。

「貫け！氷堅槍！！」

そう言つて龍刃に気を流し込み、突きの構えを取る。そして、龍刃を突きのように突き出した瞬間、純白の刀身から気の塊がガデッサに目掛けて飛び出す。

その塊は氷の力によつて、巨大な氷の槍となり、ガデッサを貫いた。そして、ガデッサが爆発すると、氷の破片が飛び散り、赤いGN粒子が拡散した。

「最後はこいつで決める！特殊形態！雷轟！」

そう言つと、白の部分が黄色に変わる。

クリアパーツがメノウのような黄色になり、零落白夜の刀身の色が元に戻り、雷を纏う。

その姿は雷を司る特殊戦闘形態、雷轟と言つた。

「一気に決めるぜ！」

雷の剣、龍刃・雷轟ノ型を両手で持ち、頭上に掲げるように構える。その刀身に蒼太が流し込んだ気が溜め込まれていき、光輝く。

そして、それが限界に達した時、龍刃が勢い良く振り下ろされた。

「轟け！雷閃撃！！」

刀身から雷を纏った気がビームのように発射され、ガラッゾに迫る。ガラッゾには避ける暇も無く、雷閃撃が炸裂した。

そして、ガラッゾも他の2機同様、爆発し、赤いGN粒子を拡散させた。

「…これで全部…でも、まだ終わりじゃない！」

そう言って、蒼太はガデッサ達が侵入して来た部分から飛び出した。

「ふっ…やるじゃねえか」

その頃、黒いISを纏った男は上空から蒼太の戦闘の様子を見ていた途中だった。

「まさか、形態を目まぐるしく変える事が出来るとはな……………ん？」

その時、センサーに何かが反応し、男は直ぐ様、そのデータを表示した。

そのデータを見て、男は驚愕する。

何故なら、自分の所へ純白の機体が迫っていたのだから。

「ちっ！気付かれていたのか！？」

男は直ぐ様離脱しようとしたが既に純白の機体はすぐ側まで接近していた。

「待て！」

「っ!？」

後ろから聞こえた声に反応した男が振り向く。

そこには、進化した純白の機体、白龍神を纏い、龍刃・白銀ノ型を右手に持った蒼太が居た。

「天空寺…蒼太…！」

「ナレーションSIDE OUT」

「蒼太SIDE」

僕は上空に舞い上がり、センサーで確認した“黒い何か”に向かった。

その黒い何かの正体はISだった。

接近した時、離脱しそうだったので声をあげた。

「待て！」

そう言くと、黒いISは振り向く。

その瞬間、僕は驚いた事が2つあった。

1つは、黒いISを纏っていたのが、“男”だった事。もう1つは、その黒いISが白龍神にそっくりだった事だ。

よく見ると様々な所の形状が違っていたが、色が白龍神と対照的な黒と赤だという事等以外は殆どの姿は白龍神と酷似していた。

「天空寺…蒼太…！」

その時、男は僕の名をはっきり呼んだ。

「な、なんで僕の名前を！？」

驚いた僕は男に聞き返す。

「俺は貴様を知っている！何故なら俺とお前は同じ存在だからな！」

「同じ存在……？……まさか、貴方は！？」

僕の中にある推測が生まれる。

そして、その推測は現実となった。

「そうだ！俺の名は秋野紅也、貴様と同じ、転生者だ！」

そう言つて、秋野紅也と名乗った男は右手に握っていたものを見せた。

それはテニスボール位の球体状の物体。色は金色に赤い光のラインが刻まれている。

それがなんなのか、僕は分かった。

色は違うが、あの形。

そう、あれは――

「セイントカプセル……？」

「その通りだ！」

なんと、それはセイントカプセルだった。

しかも、光のダイヤモンドの中心には赤い光が灯っている。

「お前に思い知らせてやる！“破壊”のガンダムの力を――！」

そう言つと、セイントカプセルが真っ赤に光り、辺りを閃光が覆った。

「くっ……あ、あれは!？」

閃光が晴れ、僕の目に飛び込んで来たのは、黒を中心とした装甲に、メタリックレッドの関節、右手には小型のマシガンのような銃を、左手にはライフルのような銃を持ち、背中からは八枚の黒い翼が生え、頭部は黄色のツインアイに、赤い顎のような物があり、額には左右対称のブレードアンテナが2つ。

それは、まさしく“ガンダム”。

そして、それがどのガンダムなのかも、僕は分かった。“攻撃の自由”の名を持つガンダム。

「ストライク…フリーダム…」

僕は無意識に機体の名を口にしていた。

そして、その背中からは、赤いGN粒子が散布されている。

「見たか、天空寺蒼太!今からお前を叩き潰してやる!この、『二ヒトフリーダムガンダム』でなあ!!」

そう言って白龍神に向かって二ヒトフリーダムが突撃してきた。

僕はそれを迎え撃つように龍刃を構えて向かって行った。

第7話 もうひとりの転生者（後書き）

オリキャラや機体についてはまとまりしだい、投稿します。

第8話 紅と蒼の真実

〈ナレーションSIDE〉

第2アリーナの上空で、純白の機体、白龍神と漆黒の翼を持つ黒い機体、二ヒトフリーダムが激戦を繰り広げていた。

「おらおらおらあ！」

「くっ！」

二ヒトフリーダムのマシンガンとライフル、そして腹部のメタリックレッドの砲口から放たれる真つ赤な粒子ビームが絶えず白龍神に迫り来る。

蒼太は時には大きく移動し、時には小刻みに旋回運動をしてなんとか粒子ビームをかわしていた。

「これならどうだ！？」

そう言つて紅也はマシンガンとライフルを組み合わせる。
2つの銃器が変形合体し、長大な漆黒の銃器となった。

「フェニックスカノン！発射あー！！」

フェニックスカノンの銃口からガデッサのメガランチャーよりも太い、粒子ビームが放たれ、白龍神に迫り来る。

「ちいっ！」

ウィングスラスターを噴かし、粒子ビームを回避した蒼太。

その粒子ビームは上空にあった巨大な雲を跡形も無く、吹き飛ばした。

「なんて威力だ……」

そう言つて蒼太は二ヒトフリーダムに視線を戻し、龍刃から零落白夜の刀身を、雪羅をクローに切り換え、それを収束したエネルギーソードを出現させ、二ヒトフリーダムに接近する。

迫り来る粒子ビームをエネルギーソードと龍刃で消滅させ、白龍神が距離を詰めていく。

「肉弾戦か、面白れえ！」

マシンガンとライフルを収納した紅也の手に黒い刀が現れる。

「な！？雪片！？」

蒼太は刀を見て驚愕する。その刀が、白式の刀、雪片に黒いという事と形状が少し違う以外そっくりだったからだ。

「違うな。こいつは『零片参型』、全てを切り裂く無敵の刀だ！」

そう言つて、零片参型の刀身がスライドし、そこから真っ赤な光の刀身が現れる。その刀を振りかざし、二ヒトフリーダムが突進する。

「うおりゃあ！」

「はあああつ！」

同時に振り下ろされた青白い刀身と、真っ赤な刀身がぶつかり、火花が散る。

「軽いんだよ！」

だが、ニヒトフリーダム出力が勝り、白龍神が吹っ飛ばされる。

「貰ったあ！」

そこへ追撃をするべく、零片を振りかざした紅也が迫る。

だがウイングスラスターで体勢を立て直した蒼太は雪羅から荷電粒子砲をニヒトフリーダムに放った。

「甘えんだよ！」

放たれた青白い閃光に突進し、紅也は零片を振り下ろす。

すると、青白い閃光は信じられない事に、縦に真つ二つに両断され、消滅した。

「ば、バカな！？」

「おらああああ！」

そのまま、ニヒトフリーダムが体当たりを白龍神に喰らわす。

大きく後退した蒼太は一旦距離を取った。

「なんて強さだ…それにその刀、零落白夜が搭載されているのか…？」

「それも違うな。この刀は俺のIS、『零式』のワンオフアビリティー『刃斬零』だ。こいつは刃に触れた物全ての分子結合を断ち切る。つまり、こいつの前では絶対防御なんて無いも同然なんだよ！」

「そ、そんな…」

「てめえの零落白夜だって似たようなもんだろが。全く、てめえの実力がこの程度とはな。よくガデッサ達を倒せたもんだな！」

「やつぱり、あのガデッサ達は貴方が送り込んだんだな!？」

「ああ、そうだ」

「どうしてそんな事を!？」

「訳は…天空寺蒼太! 貴様の抹殺と貴様のセントカプセルの奪還だ!」

紅也が蒼太を指差しながら言い放つ。

「俺は貴様を許さない…! お前も、俺の母さんを殺したお前の両親もな!」

「な…!？」

そう言われ、驚愕する蒼太。

「僕の両親が貴方の母さんを殺した…?」

「ああ、そうだ。そしてお前と俺は同じ存在なんだよ! 転生者としても、同じ力を持つ人間としても!」

「同じ力って…まさか!？」

「その“まさか”だ!」

そう言つて零片をしまい、右手を構える紅也。
すると、その手が輝き出した。

「俺にも超気功があるんだよ」

それを見ていた蒼太は驚愕のあまり、黙り込んでしまふ。

「どうして…貴方が…」

「教えてやるよ。てめえの両親が何をしたのか！」

蒼太達の世界の山奥にあるとある研究所。

そこでは、人間の遺伝子の研究がされていた。

“表”では。

その“裏”ではその遺伝子の研究を利用したとんでもない計画が進んでいた。

それは“優れた人間を人工的に作り出す研究”。

その研究のメインチームは4人。

一組の夫婦の科学者と、女性科学者。

そして研究所の所長。

研究の過程で数多の失敗作が生まれるなか、遂に女性科学者が成功体を作り出す事に成功した。

その能力は“気”の力がとてつもなく強い事。

その成功体は実験体1号と識別され、女性科学者が付けた名が瞳がルビーのように紅い事から『紅也』と名付けられた。

それから二年後、夫婦の方も、成功体を生み出した。優れた能力は

1号同様、“気”の力が強い事と、動物と会話出来る能力。実験体2号と識別され、名付けられた名前は『蒼太』。

瞳がサファイアのような為、そう名付けられた。それから1号と2号には毎日、“実験”という名の“地獄”が始まった。

それから更に二年後。

遂に事件が起きた。

データも充分に採種出来たという事で、実験体のどちらかを“処分”する事になった。

それに選ばれたのは2号。理由は、気の強さでは1号の方が上であり、2号には気による他者への治癒能力と動物と会話出来る能力もあったが、1号は純粹に気の力に特化しているので、2号が処分される事になった。

だが、2号を作り出した夫婦は納得がいかず、激昂に任せ、女性科学者を殺害。そのまま所長も殺害してしまった。

だが、夫婦はその現場を偶然1号が見ていた事に気が付かなかった。そのまま夫婦は研究所に火を放ち、自殺した。

その中で、2号は偶然火に気が付いた所員の一人によって間一髪脱出していた。その後、2号は警察に保護され、研究所で過ごした事を消され、親戚に預けられた。

一方、焼け跡をくまなく探したが、何故か所長と1号の遺体は見つからなかったとか。

「……これが俺と貴様の過去だ」

紅也が言う。蒼太はあまりにも突拍子が無くて、呆然としていたが、心の中では今の説明がしっくりくると思っていた。

「この中の夫婦がお前の両親で、女性科学者が俺の母さんにあたる訳だ。そして、その1号が俺。2号がお前だ」

紅也は自分と蒼太を指しながら言う。

「お前の両親が母さんを殺したのを見た後、俺は研究所から逃げ出した。ひたすら逃げた。でも、途中で警察に保護され俺は施設に入れた。それからだ。俺の周りに居た奴は最初は仲良くしてくれたが、俺の力を見ると、全員気味悪がつて俺を避けるようになった。大人達も似たようなもんだったよ。だから俺は施設から脱走した。それから生きる為ならなんでもやったよ。盗みやかっぱらいとかな」

「……………」

蒼太は黙って聞いていた。

「そんな事をつづけていたある日、俺はいつも通り食い物を探していた時だったよ。蒼太、お前を見つけた」

「え!?!」

その言葉に驚愕する蒼太。

「俺は咄嗟に声をかけようとした。でも出来なかった!何故だと思っ!?!」

「……………」

蒼太は答えない。

「その時、お前は親戚の人と手を繋いで笑っていた！それを見たら俺は声をかけられなかった！そこには俺から見たら立派な“家族”が居たからだよ！！」

紅也はまるで嘆くように声をあげる。

「なんでなんだ！俺は周りから気味悪がられ、無視され、軽蔑されているのに！お前は何故だ！？俺と同じ存在なのに！俺と同じ力を持っているのに！何故家族と笑っているんだ！」

「ぼ、僕は……」

紅也の言っている事は、半分は逆恨みも同然だが、半分は正論である。

「俺はその時お前に復讐を誓った！その為に俺は強くなると決めた！でもな、その途中で俺は死んだ！」

「え？」

「復讐を誓った時から六年後のある日、俺は道路に飛び出した猫を庇って死んだ！その猫が母さんが飼っていた猫にそっくりだったから思わず体が動いたんだ。俺はその時、跳ねられて頭を打って即死だった。でもな、気が付くと俺は全く違う空間に居た。そこで俺は神によって転生者になった！もっともその神は地獄の神だったがな」

「地獄の神……」

「そして俺はセントカプセルと零式を貰い転生した。それがお前が転生する一年前だ。だが、この世界に来て俺は落胆した！女が」

Sを使えるだけで威張りちらし、男は良いように使われているだけ。こんな理不尽があつて良い訳ないだろ！そんな時だった。“あいつ”に会ったのはな”

「あいつ？」

「神田っていうジジイだ。あいつは突然俺の目の前に表れて俺にこう言った。『母親を生き返らせたいか？』ってな！俺はジジイから詳しく話を聞いた。あいつに協力すれば、母さんを生き返らせるって話だったよ。俺はその話を承諾し、様々な事をこなした！その途中で、俺は“破壊”のガンダムの力を手に入れ、零式も『黒凰我』になった。そんな俺にジジイはお前のセイントカプセルの奪還を依頼したんだよ！」

「どうしてセイントカプセルを！？」

「お前は知らないようだな。セイントカプセルにはとあるガンダムのデータが2つに分けられ、片方に半分ずつ記録されている。あのガンダムだよ！地球をも再生出来る“悪魔”のガンダムがなあ！！」

「悪魔って、まさか！？」

悪魔の名が付くガンダム。それは1つしかない。

「そつだよ！最凶のガンダム、“デビルガンダム”だ！！」

「で、デビルガンダム…」

「どうやらジジイはデビルガンダムの力で母さんを生き返らせるらしい。だがな、俺にはもっと大きい野望がある！デビルガンダムの力で母さんを生き返らせ、この世の中を破壊する事だ！！何がIS

だ！何が女尊男卑だ！そんなもんは俺が全部ぶっ壊してやる！そして俺は母さんと一緒に暮らすんだ！！」

「……………」

「その為に天空寺蒼太！お前を倒してセイントカプセルを『ピピッちいっ！なんだこんな時に！？』」

紅也が言い終わる前に通信が入る。

「あ！？なんだと！？ここまで来てそれかよ！？……………ちいっ！分かったよ！」

そう言っ通信を切り、蒼太に向き直る。

「今日は見逃してやる。だがな、お前は俺が殺す！もし俺を倒したいならせいぜい強くなる事だな！まあ、お前がその時まで生きていればの話だな！」

そう言っ二ヒトフリーダムが漆黒の翼を広げ、離脱していった。だが、紅也が去っても、蒼太はしばらくその場に呆然と佇んでいた。

オリジナル登場人物、IS設定（前書き）

連続でいきます

オリジナル登場人物、IS設定

名前 秋野紅也

(あきの こうや)

適正ランク A+

好きな物 ラーメン ハンバーガー ガンダム 夜空

嫌いな物 蒼太 イジメ ウサギ

年齢 17歳

誕生日 8月6日

身長 174センチ

体重 59キロ

機体 零式↓黒凰我↓ニヒトフリーダムガンダム

見た目 ルビーのような瞳をしており、髪は茶髪。

蒼太同様、細マッチョでイケメン。

性格 蒼太同様、ガンダムが好きでインフィニット・ストラトスも知っている。かなり攻撃的な性格。だがイジメ等は決して許さない。

人工的に生まれた存在で、研究所での識別は『実験体1号』。

蒼太の両親が自分の母親を殺害した現場を見てしまい、更に蒼太が親戚と仲良くしている所を見て蒼太を激しく憎んでいる。

転生者で蒼太より一年早く転生した。

“破壊”のガンダムの力を持ち、主に射撃主体で闘う。操縦技術はかなり高い。生身での戦闘能力は恐ろしく高いが頭はそれなりに良い位。しかし、ISの改造も出来る。
大食いで、恋愛は鈍感。

特異体質

人工受精の時に別の遺伝子を組み込まれた事によって、備わった能力。

遺伝子レベルで組み込まれているので、無くなる事は無い。

・超気功
ちやうきこう

蒼太同様、『気』がとても強い体質の事だが、蒼太よりも強力。
その為、気の総量は蒼太より高い。

・勁
けい

蒼太と同じだが、治癒の勁は自分のみ作用する。
また、紅也の性格上、攻撃の勁を平気で使う。

・技一覧

攻撃

・気功弾
きこうだん

気の弾を連続で撃ち出す。

・三倍速気功弾
さんばいそくきこうだん

その名の通り、三倍の早さで気功弾を放つ。

りゅうえんけん

・龍炎拳両手を合わせ、長大な気の剣で切り裂く。

・百歩神拳
ひゃっぽしんけん

気をビームのようにして撃ち出す。

・自在拳
じざいけん

全身の気を集め、巨大な気の玉を放つ。

放った気は紅也の意思でコントロール可能。

治癒

・超循環
ちやうじゆんかん

体内の気を循環させてダメージを回復させる。

ISについて

零式^{ぜろしき}

地獄の神から紅也が貰った黒いカラーリングの白式。コアナナンバーはNo.000。

紅也によって改造が施されている。

待機状態 黒いガントレット

世代 第4世代機

シールドエネルギー

1300

機体性能

攻撃 S

防御 S

機動 B+

武装

（改造により、バス・スロットが2倍）

雪片^{ぜろひら}

雪片が黒くなった刀型の武装。

バリアー無効化あり。

レールガン

両腰に搭載されているレールガン。使わない時は折り畳まれる。

（フリーダム^{フリーダム}の腰のレールガン）

ガトリングマシンガン

ガトリング砲の銃身とマシンガンのグリップを合体させた片手持ちのガトリングガン。放たれるのはビームで色は赤色。

ワンオフアビリティ
単一仕様能力
刃斬零じんざんれい

シールドエネルギーを消費し、触れた物の分子結合を断ち切る事が出来るが、零落白夜によって中和されてしまう。色は赤。
紅也の改造によって消費されるシールドエネルギーが半分になっている。

第2形態
黒凰我こくおうが

零式がセカンドシフトした姿。

姿は黒い鳳凰をイメージしている。

関節は赤色。

性能が上がり、射撃武装が増えた。

シールドエネルギー

1900

武装

ぜろひらにがた
零片式型形状は変わっていないが、バリアー無効化と斬撃の威力が上がっている。

レールガン2

威力が高まったレールガン。形状は変わらず。

ガトリングマシンガン2

連射能力と威力が上がり、少し銃身が長くなった。

キャノンライフル

巨大なビームライフル。

連射より、威力を重視している。

（ウイングガンダムのパスターライフル）

零羅^{れいら}

左腕に搭載されたシールド発生装置。
荷電粒子砲とクローの機能は無い。

オリジナル機体紹介

機体名 ニヒトフリーダムガンダム（否定の自由）

動力源 GNDライヴーン

待機状態 赤い宝石が付いた黒いガン

トレット

機体説明 黒凰我とセイントカプセルが融合した“破壊”のガンダム。
見た目は装甲が黒くなり、関節がメタリックレッドになったストライクフリーダム。全身装甲なので、水中や宇宙でも活動出来る。

コアとGNDライヴが融合し、既にISでは無くほぼMSになっている為、シールドバリアーと絶対防御が無く、装甲がEカーボンになっている。（武装と機体の量子変換と単一仕様能力は健在）
性能がかなり高く、ISではまず歯が立たない。

武装（ビーム系の色は赤色）ゼロひらさんがた 零片参型
更に威力がアップした零片。粒子を纏って切れ味を上げる事が出来る。

GNビームマシンガン
連射性能を重視した武装。対ビームコーティングされた銃剣が格納されている。（スーパーロボット大戦Ⅶのストレイトバードのクロウマシンガン）

GNキャノンライフル2

威力を重視した武装。

威力が2倍近く上がっている。

フェニックスカノン

ビームマシンガンがグリップに、キャノンライフルが銃身全体に変形合体した大型ライフル。

威力はISの絶対防御すら貫く。

（ダンボール戦機のフェンリルのドミニオンライフル）

GNレールガン³

威力が上がったレールガン。形状は変わらず。

GNカリドウス

腹部のメタリックレッドの砲口。

威力はフェニックスカノンの半分位。

GNスーパードラグーン

黒いカラーリングのドラグーン。

武装はビーム砲のみだが威力が上がっている。

翼に8つ、腰

背部に4つ搭載され、大気圏内でも使える。

GNヴォワチュール・リュミエール

ドラグーンをパージした時に、翼の間に発生する赤い翼。

展開すると機動性能が上がる。

GNビームフィールド

両腕に搭載され、GNフィールドを発生させる事が出来る。

動力源について

GNドライヴン

Nはニヒト（否定）を表す。粒子の色は赤色で毒性がある。（本人は平気）

コアと融合している為、黒凰我の単一仕様能力も使える他、ドライ

ヴ字体にも特殊能力があり、それが単一仕様能力になっている。

ドライブアビリティー

ニヒト・ゼロ

発動させると、真つ赤な翼が展開され機動性能が上がり、翼に触れた物を分子レベルまで粉々にする。

展開中はヴォワチュール・リュミエールとドラグーンは使えない。

特殊能力

刃斬零
じんざんれい

黒凰我と同じで、使用時は赤色の刀身が出現する。

シールドエネルギーの代わりにGN粒子を消費する。

トランザム

圧縮粒子を解放し、性能を4倍に底上げる。

しかし5分で解除され、その後5分は性能が半分に落ちる。
発動中は機体が赤くなる。

サブユニット

パイロットの意思を補助として使用出来る能力。

この機体のサブユニットはキラ。(DESTINY)

主な役割はマルチロックオンシステムの補助。

第9話 それぞれが抱く思い（前書き）

お待たせしました。

第9話です。

第9話 それぞれが抱く思い

〔蒼太SIDE〕

ニヒトフリーダムが離脱した後、僕がピットに戻ると篤さんが凄まじい勢いで駆け寄って来た。

「蒼太！大丈夫か！？確か腕に何か刺さったよな！？大丈夫なのか！？」

「落ち着け、馬鹿者」

「いつ！？」

出ました、原作でお馴染み出席簿アタック。
しかも“角”で。
炸裂した篤さんは頭をおさえ、悶絶している。

「天空寺、左腕を見せてみる」

「あ、はい」

先生に言われた通り、左腕の制服をまくり上げる。
だが、ガッデスのフアングが刺さった二の腕は、まるで何事も無かったように傷一つ無かった。
それを見た千冬達は驚きを隠せずにいる。

「天空寺君、何処か具合が悪いところとかはありませんか？」

真耶が心配そうに尋ねる。

「別になんともありませんけど？」

その問い掛けに平然と答える蒼太。

「紅椿があれば…」

「ん？何か言いましたか、篠ノ之さん？」

「い、いえ、何でもありません！」

少し慌てた様子で否定する篤さん。だが、僕にははっきりと聞こえていた。

篤さんが間違いなく、『紅椿』と言った事が。

その後は、今日の襲撃者についての取り調べを受けた。

その時、鈴さんは無事だという事を織斑先生から聞き、一安心した僕だった。

〈蒼太SIDE OUT〉

〈ナレーションSIDE〉

「がああああああっ！！」

とある司令室のような所で、紅也が苦しんでいた。

左腕の腕輪のようなものから電流が流れていたからだ。

その電流が止み、紅也は倒れ込む。

体からは煙が出ており、皮膚には火傷を負っていた。

「紅也、貴様は自分が何をしたのか、分かっているのか？」

倒れている紅也に椅子に座った黒いローブを纏った老人が問い掛け

る。

「あくまで今回は、アリーナへのジャミングと天空寺蒼太の監視といった筈だ。戦闘を行えとは一言も言っておらぬわ!!」

そう言うと、老人はスイッチのようなものを押す。すると、紅也の腕輪から電流が発生した。

「ぐあああつ!!」

「貴様を拾ってやった恩を忘れたのか!? この恩知らずめが!」

スイッチを離し、電流が止まる。

「もうよい。次の命令まで貴様は自室で謹慎しておれ! 良いな!」

「…分かり…ました…」

「なら良い」

紅也の返事を聞くと、老人の座っている椅子がエレベーターのように下に降りていき、椅子があった場所はカバーが閉まった。

「畜生…」

痛みを堪えながらゆっくりと立ち上がった紅也が司令室から通路に出る。

そこには、3人の女性が居た。

「あらあら、随分と酷くやられちゃったわね、紅也君」

「スコール……名前で呼ぶなって言っただろ」

「私の事は名前で呼んでるのに？」

「……ちっ」

そのまま紅也は通路の奥へと進んでいった。

「けっ！相変わらず可愛げの無い奴だ！」

「まあまあ抑えて、オータム」

スコールと呼ばれた金髪の女性が、オータムと呼ばれた女性を宥める。

「仕方ないでしょ、紅也君は昔の事でああなっちゃったんだから。エムもそう思わない？」

スコールが3人目の、織斑千冬にそっくりな容姿の女性、エムに話を振る。

「私は元からあいつを信用してない」

「あら、つれないわねえ」

「それよりもスコール！いつまであのクソジジイに従ってりゃあ良いんだよ！」

「それは私も同感だ」

「もう少しの辛抱よ。私だって嫌なんだから。でも神田の技術のお

蔭で私達のISが強化されたんじゃない」

「それとこれでは話は別だ！全く…」

彼女達3人は『亡国企業』の幹部。

すなわち、ここは亡国企業のアジトなのだ。

く紅也自室く

「くそ！神田のジジイめ、拾ってやったからって威張りやがって！」

『大丈夫、紅也？』

右腕のガントレットから、青年の声が発せられる。

「心配すんな、キラ。これ位、気の循環能力で治る。それに、俺だつていつまでもジジイの言いなりじゃないからな」

『…そう』

く地下く

『もう少しの辛抱よ。私だって嫌なんだから。でも神田の技術のお蔭で私達のISが強化されたんじゃない』

『それとこれでは話は別だ！全く…』

『心配すんな、キラ。これ位、気の循環能力で治る。それに、俺だ

つていつまでもジジイの言いなりじゃないからな』

沢山のモニターがあり、工場のような機械等がある司令室の地下。そのモニターで、スコール達3人と、紅也を映したモニターを見ている神田が居た。

「あいつらも使いづらくなって来たな」

神田は椅子から立ち上がり、モニターとは反対の方向へ歩いていく。

「常に世界を動かして来たのは一部の天才だ。俗人ではない。だがワシはそれすら凌駕する真の天才……私には天才の先に行く権利がある」

神田が足を止め、見上げる先には左右対称の緑色の目が光を放ち、蠢いていた。

「夜、IS学園、アリーナ」夜のアリーナに彼女、篠ノ之箒は居た。彼女は念入りに辺りを見渡し、1人だという事を確認する。確認し終えた後、ポケットから携帯電話を取り出し、とある人物に電話する。

『やあやあ、どうも！皆のアイドル東さんだよー！』

「……姉さん」

その相手は世界が追っているISの開発者、篠ノ之束だった。

『やあ、篝ちゃん！久しぶりだね！束さんは嬉しいよ！久々なんだし姉妹で積もる話でもしようか？』

「あの、それより…」

『分かってるよ。紅椿の事だね？大丈夫大丈夫もう殆ど完成してるから。来月の頭には届けに行くから心配しないで』

「ありがとう、姉さん。あと姉さんに聞きたい事が…」

『聞きたい事？』

「白式は姉さんが作ったんですか？」

『白式？何それ？なんかの名前？』

「え？姉さんじゃないんですか？あのISを作ったのは？」

『その白式ってISなの！？そんなISはいくら天才の私でも作った覚えが無いな！その白式ってISは今学園にあるの？』

「ええ。まあ…」

『ふーん。まあ、良いや。とりあえず紅椿はもう少しだから待っててね。それじゃあバイバイ』

そう言っただけで電話は切れた。篝は携帯電話をパタンと折り畳む。

「もう少しで…私の力が手に入る…そうすれば、蒼太と一緒に戦える…」

夜のアリーナに簞の声だけが響いていた。

（蒼太自室）

その頃、蒼太は自室で白龍神の改造をしていた。

「とりあえず、こんなもんか」

蒼太は操作していたパソコンから指を離す。

その改造により、白龍神のシールドエネルギーの消費量は更に減っていた。

だが、愛機が更に強くなったというのに蒼太の顔は暗かった。

「僕の親が…あの人の親を殺した…」

蒼太は紅也に言われた事を気にしていた。

そのまま蒼太は考え込む。

「まあ…考え込んだ所で今の僕に出来る事は無いか…」

はあ、と溜め息をつき、蒼太はベッドに入り、意識を手放した。
（ナレーション SIDE OUT）

（蒼太SIDE、2週間後）

フリーダムの襲撃から2週間が経った。

あれから特に変わった事は無かったが、あの人に言われた事が気になり、このところ全く授業なんか集中出来ない。

今日もあの人に言われた事について考えていた。

「まず、今日は皆さんに転校生を紹介します。しかも2人です！」

（僕は本当は死ぬ筈だった…でも生き残り、伯父さん達に預けられた）

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。不慣れな事もあると思いますがよろしくお願いします」

（あの人も特異体質のせいで僕と同じように軽蔑された。そしてあの人も同じ力を持っている。でもあの人は僕とは違う…）

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

（あの人はもつと辛い目にあっている。しかも僕の両親があの人を母親を殺した…それでいて僕は伯父さん達と暮らしている。恨まれて当然だな…）

「っ！貴様が…」

（おまけにあの人は既にガンダムの力を手に入れている。でも僕はまだ…僕があの人に恨まれているからかな？）

「はあ」

溜め息と共に、僕は机に突っ伏す。

その瞬間、突っ伏した頭の上を何かが通り過ぎたような感覚がした。

「ん？」

顔を上げる僕の目には、原作のヒロインの1人であるラウラ・ボー・デヴィツヒが立っていた。

その奥にはシャルロット・デュノアも確認出来る。

そういえばもう2人が転校してくる時期だったな。

でも何故かラウラは顔を少し赤くし、ワナワナと震えている。

「なにか？」

某小学生ペンギンのような言い方で僕はラウラに問い掛ける。

「わ、私は認めない！貴様があの人を倒した等、認めるものかあ！」

そう言つて、ラウラは席に向かって行つた。

「…何が起こつたんだ？」

僕が前を向くと、山田先生とシャルロット（シャルル）は苦笑いを
していて、織斑先生は何故か呆れていた。

「????」

（蒼太SIDE OUT）

（ナレーションSIDE）

ここで、少し時間を遡ってみるとしよう。

「まず、今日は皆さんに転校生を紹介します。しかも2人です！」

その言葉で教室がざわめく。が、そのざわめきはドアが開く音と、入室して来た2人の内1人が蒼太と同じ男の制服を着ていた事によって静まり返った。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。不慣れな事もあると思いますがよろしくお願いします」

まず、向かって左側の金髪で男の制服を着ているシャルルが自己紹介する。

「…男？」

「はい。此方に僕と同じ境遇の方がいらしていると聞いて、本国より転入して来ました」

その刹那、教室の空気が震えた。

『きゃああああああー！っ！！！』

「え！？」

「転校生！しかも2人目の男の子！」

「超美形！守ってあげたい系の！」

「あー騒ぐな、毎度毎度うつとしい」

「み、皆さん、まだもう1人の方が自己紹介してませんから…お静かに…」

千冬と真耶の言葉で教室は静かになる。

「挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

ラウラと呼ばれた銀髪で左目に眼帯をした女子が敬礼をして千冬に応える。

それからラウラは手を下げて言い放った。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

その一言だけを。

「あ…あの、以上ですか？」

「以上だ」

真耶の問い掛けをさらりと切り返したラウラは真ん中の一番前の席にてボーツとしている蒼太を発見する。

「っ！貴様が…」

蒼太に近寄り、平手打ちを喰らわすようとラウラは手を振り上げる。だが、その手は突然蒼太が机に突っ伏した事により先程まで蒼太の頭があつた空間を通り過ぎただけで終わった。

「…え？」

それにより、教室になんともいえない空気が流れ、教室中の誰もがラウラに視線を向ける。

「なにか？」

そこへ追い討ちを掛けんとばかりに蒼太の問い掛けがラウラにクリティカルヒットした。

「わ、私は認めない！貴様があの人を倒した等認めるものかあ！」

顔を真っ赤にしたラウラはそれだけ言い放ち、席に向かっていく。

これが、全ての真実だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1932x/>

IS インフィニット・ストラトス蒼き翼の勇者

2011年11月30日14時56分発行